茨城県教育財団文化財調査報告第372集

駒寄溜遺跡

こまよせだめ

主要地方道結城坂東線バイパス事業
地内埋蔵文化財調査報告書

平成25年3月

茨城県境工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では，地域の特性を生かした振興を図るための優れた道路網の形成を目指し，また，県内主要都市相互間の交流時間短縮の実現（県土６０分構想）に向け一般国道や主要地方道などの広域的な交通ネットワークの整備を進めております。

その一環として，茨城県境工事事務所は，坂東市弓田において，主要地方道結城坂東線バイパス事業を計画しました。しかしながら，この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である駒寄溜遺跡が所在し，記録保存の措置を講ずる必要があるため，当財団が茨城県境工事事務所から開発地内の埋蔵文化財発掘調査事業の委託を受け，平成23年６月から７月までの２か月間にわたりこれを実施しました。

本書は，駒寄溜遺跡の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深め，教育・文化の向上の一助として活用いただければ幸いです。

最後になりますが，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者であります茨城県境工事事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し，厚く御礼申し上げますとともに，茨城県教育委員会，坂東市教育委員会をはじめ，関係各位からいただいた御指導，御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成25年 3月

公益財団法人茨城県教育財団

理 事 長　鈴 木 欣 一

例　　言

1　本書は，茨城県境工事事務所の委託により，財団法人茨城県教育財団（現 公益財団法人茨城県教育財団）が平成23年度に発掘調査を実施した，茨城県坂東市弓田字立山1071番地の1ほかに所在する駒寄溜（こまよせだめ）遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査　平成23年6月1日～7月31日

整理　平成24年6月1日～7月31日

3　発掘調査は，調査課長樫村宣行のもと，以下の者が担当した。

首席調査員兼班長　　皆川　修

主任調査員　　本橋　弘巳

調査員　　佐藤　一也

4　整理及び本書の執筆・編集は，整理課長原信田正夫のもと，首席調査員綿引英樹が担当した。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し，X = +9,600 m，Y = +5,360 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお，この原点は，世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40 m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分し，4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ1，2，3…とし，「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は，北から南へa，b，c…j，西から東へ1，2，3，…0と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2　実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構　　PG －ピット群　SD －溝跡　SI －竪穴住居跡　SK －土坑

遺物　　DP －土製品　M－金属製品　Q－石器・石製品　TP －拓本記録土器

土層　　K－撹乱

3　遺構・遺物実測図の作成方法については，次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1，各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は，個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は，原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は，個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は，次のとおりである。

□ 焼土・施釉　□ 炉・繊維土器　□ 粘土範囲・黒色処理　■ 煤

●土器　○土製品　□石器・石製品　△金属製品

－－－－ 硬化面　－－－－－ 焼土範囲

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。また，土層解説中の含有物については，各々総量を記述した。

5　遺構一覧表・遺物観察表の表記は，次のとおりである。

(1) 現存値は（　）を，推定値は［　］を付して示した。計測値の単位はm，cm，gで示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は，残存率，写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし，本文，挿図，観察表，写真図版に記した番号と同一とした。

6　竪穴住居跡の「主軸」は，炉・竈を通る軸線とし，主軸方向は，その他の遺構の長軸（径）方向と共に，座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N－10°－E）。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
駒寄溜遺跡の概要 …… 1
第１章　調査経緯 …… 3
　第１節　調査に至る経緯 …… 3
　第２節　調査経過 …… 3
第２章　位置と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　調査の成果 …… 11
　第１節　調査の概要 …… 11
　第２節　基本層序 …… 11
　第３節　遺構と遺物 …… 12
　　１　縄文時代の遺構と遺物 …… 12
　　(1) 竪穴住居跡 …… 12
　　(2) 炉跡 …… 14
　　(3) 遺物包含層 …… 15
　　２　平安時代の遺構と遺物 …… 22
　　竪穴住居跡 …… 22
　　３　その他の遺構と遺物 …… 25
　　(1) 土坑 …… 25
　　(2) 溝跡 …… 35
　　(3) ピット群 …… 37
　　(4) 遺構外出土遺物 …… 38
　第４節　まとめ …… 39
写真図版 …… PL 1 ～ PL 6
抄　録

駒寄溜遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

駒寄溜遺跡は，坂東市の北東部に位置し，江川左岸の標高 15 ～ 17 mの台地縁辺部に立地しています。遺跡の西側は，南西に向かって開析された「富田の谷」と呼ばれる浅い谷部で，調査区はその谷に向かって緩やかに傾斜しています。

当遺跡の調査は，主要地方道結城坂東線バイパス事業にともない，2,878㎡を対象に遺跡の記録・保存を目的として茨城県教育財団が平成 23 年 6 月 1 日から 7 月 31 日まで行いました。

調査の内容

調査結果，縄文時代中期の住居跡 1 軒と炉跡 1 基及び平安時代後期の住居跡 1 軒を確認しました。調査区の西部では，縄文時代に形成された遺物包含層も確認しました。その他に確認した遺構は，時期不明の土坑 77 基と溝跡 2 条，

調査区全景（南東上空から）

第１号住居跡　縄文土器出土状況

第２号住居跡　竈の遺物出土状況

ピット群２か所です。主な出土遺物は，縄文土器（深鉢・浅鉢），土師器（坏・坩・甕），須恵器（坏・甕），土師質土器（小皿），陶磁器（天目茶碗・擂鉢・皿類・碗類・瓶類・鉢類・甕類），土製品（支脚），石器・石製品（鏃・石皿・敲石・砥石・双孔円板），椀状滓などです。

調査の結果

調査区東側の台地上は未調査であるため明確ではありませんが，確認した遺構の配置や周囲の地形などから遺跡の中心は東側の台地上に広がっていることが想定でき，縄文時代中期の住居跡や平安時代後期の住居跡はその集落の外縁の一部である可能性が高いと考えられます。

遺物包含層の調査によって，台地から富田の谷に向かって土砂とともに多くの土器片が流れ込んでいたことが判明しました。出土した土器は，縄文時代のものが多く，該期の集落が東側の台地上に存在していたことを裏付けています。また，包含層の上層からは，土師質土器や陶磁器類も出土しており，長期にわたって谷部に土砂とともに遺物が流れ込んでいたことがうかがえます。

当遺跡周辺では，複数の時期にわたって断続的に集落が営まれていたものと考えられます。「富田の谷」の左岸に位置する談義所遺跡や長丁遺跡，右岸の打出遺跡や黒阿弥陀遺跡では縄文時代前期から後期にかけての土器や古墳時代の土師器が採集されており，当遺跡を含めて，移動や廃絶を繰り返しながら集落が展開していたものと思われます。

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

平成19年2月26日，茨城県境工事事務所長は，茨城県教育委員会教育長に対して，主要地方道結城坂東線バイパス事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は平成19年10月24日に現地踏査を，平成22年6月15，17，18日，9月14日に試掘調査を実施し，遺跡の所在を確認した。

平成22年10月6日，茨城県教育委員会教育長は，茨城県境工事事務所長あてに，事業地内に駒寄溜遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成22年11月19日，茨城県境工事事務所長は，茨城県教育委員会教育長に対して，文化財保護法第94条に基づき，土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は，現状保存が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要であると決定し，平成22年12月28日，茨城県境工事事務所長あてに，工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成23年1月27日，茨城県境工事事務所長は，茨城県教育委員会教育長に対して，主要地方道結城坂東線バイパス事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。

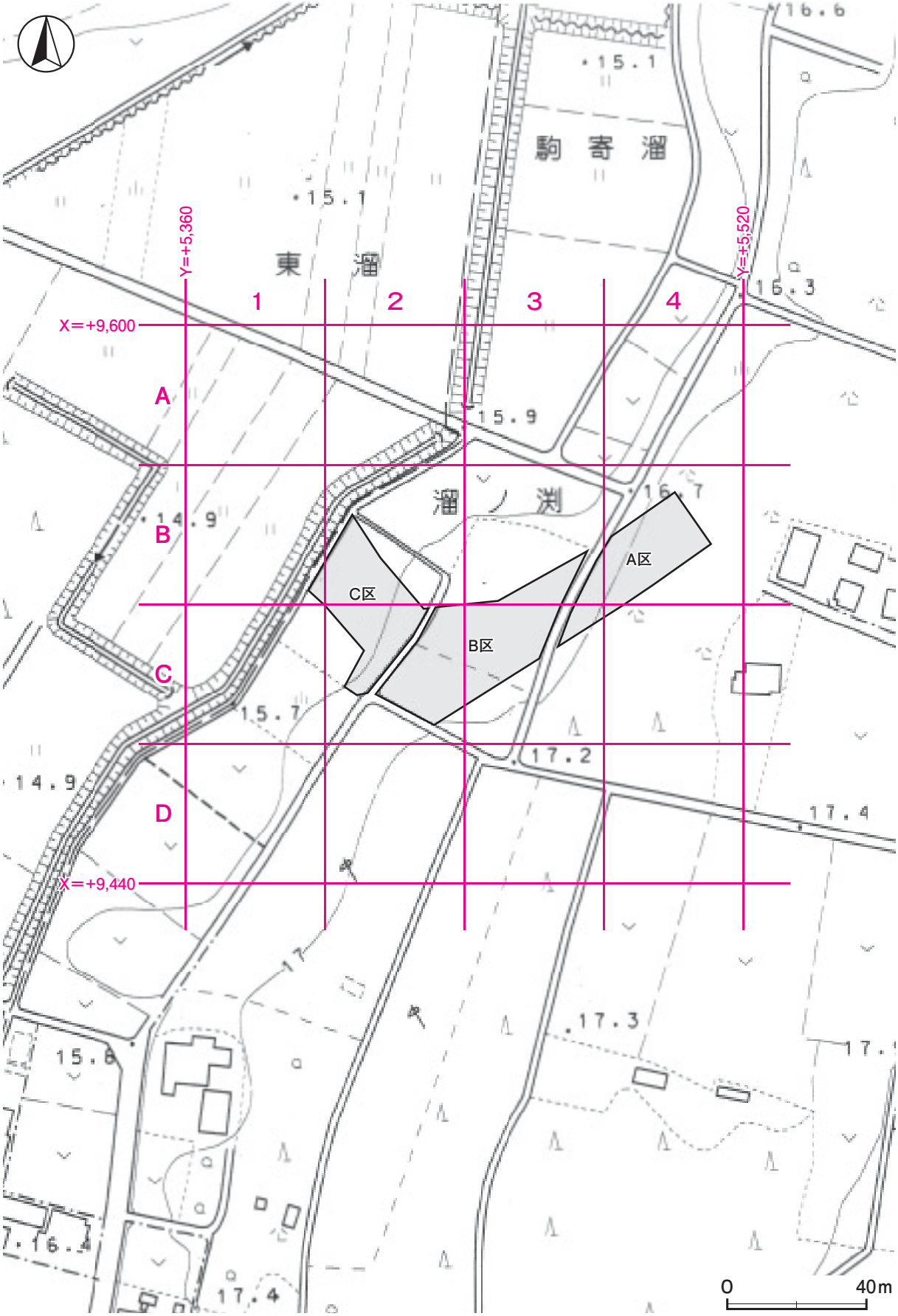
平成23年3月22日，茨城県教育委員会教育長は，茨城県境工事事務所長あてに，駒寄溜遺跡について，発掘調査の範囲及び面積等について回答し，併せて埋蔵文化財の調査機関として，財団法人茨城県教育財団（平成24年4月から公益財団法人茨城県教育財団）を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県境工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成23年6月1日から7月31日まで発掘調査を実施した。

第2節　調　査　経　過

調査経過については，その概要を表で記載する。

工程＼期間	6月			7月		
調査準備 表土除去 遺構確認						
遺構調査						
遺物洗浄 注記 写真整理						
補足調査 撤収						



第１図　駒寄溜遺跡調査区設定図（坂東市都市計画図 1,600 分の１より作成）

第2章　位　置　と　環　境

第1節　地 理 的 環 境

駒寄溜遺跡は，茨城県坂東市弓田字立山1071番地の1ほかに所在している。

坂東市は，茨城県の南西部に位置しており，市域は南北に長く，洪積台地と沖積低地が広がっている。台地は猿島台地と呼ばれ，南北約38km，東西約12kmで，標高は12～24 mである。台地東部の北側は飯沼川の低地に，南側は鬼怒川・小貝川の低地に，台地西部は利根川の低地にそれぞれ面しており，概ね南西に向かって緩やかに傾斜している。台地には飯沼川や江川，鵠戸川などの河川やその支流に開析された支谷が入り込んでおり，複雑な地形をなしている。

猿島台地を構成する地層は，貝化石を産する成田層を基盤とし，黄褐色砂や黄褐色粗砂を含む竜ヶ崎砂礫層，灰白色の火山灰質粘土層である常総粘土層，赤褐色の関東ローム層の順に堆積しており，最上部は腐食土層である。また，台地周囲の沖積低地は，東部の北側で貝化石を含む泥層が，南側は河川堆積物である砂礫層や河川氾濫時に形成された泥炭層の堆積が見られ，西部では貝化石を含む泥層や砂層が堆積して構成されている。

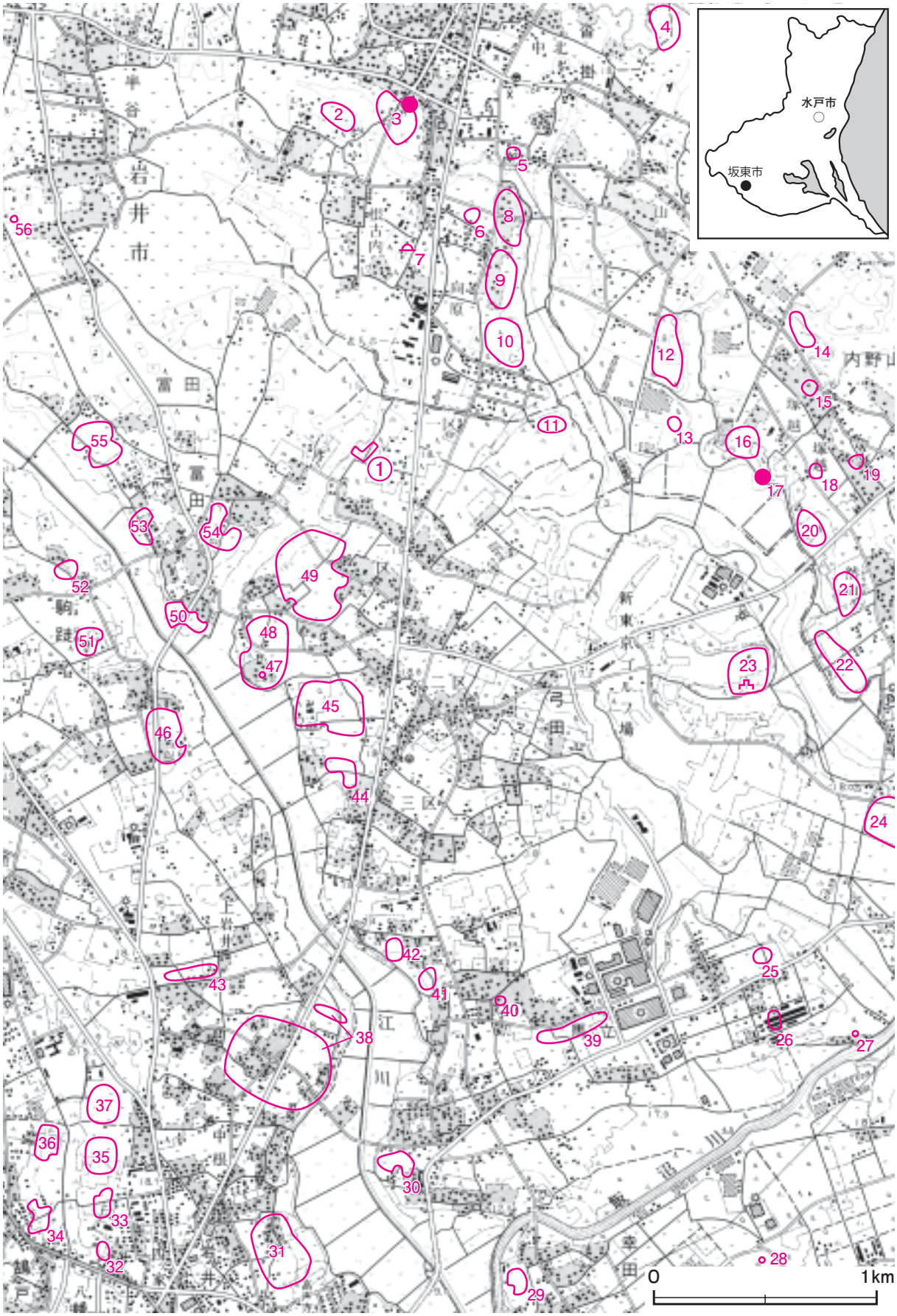
当遺跡は，坂東市の北東部，標高15～17 mの台地縁辺部に立地している。当遺跡が位置する台地は，猿島台地の中央部を南流する江川によって東西に分断された東側にあたり，標高は15～19 mである。当遺跡付近は江川や立川の支流によって複雑に支谷が形成されており，台地が狭くなっている。遺跡の西側は江川左岸から台地内部へと延びた「富田の谷」または「坊谷津」と呼ばれる谷部で，台地は谷に向かって緩やかに傾斜している。当遺跡とその周辺の土地利用の現状は，台地上は畑地及び山林で，低地は水田として利用されている。

第2節　歴 史 的 環 境

当遺跡が位置する猿島台地中央部は，江川や立川によって複雑に支谷が形成され，多くの遺跡が分布している。ここでは，当遺跡周辺の遺跡について時代ごとに記述する。

旧石器時代の遺跡は確認数が少ない。菅生沼右岸の北前遺跡[1]と高崎貝塚[2]で頁岩製のスクレイパー及び剥片が，姥ヶ谷津遺跡[3]では頁岩製の切り出しナイフや角錐状石器，ナイフ形石器及びチャート製の尖頭器がそれぞれ出土している。また，拾二ゴゼ遺跡では頁岩製のナイフ形石器や瑪瑙製の石斧が出土している。

縄文時代の遺跡は，猿島台地上に数多く分布している。貝塚が数多く見られ，貝塚の形成と海進・海退による汀線の変動の研究には重要な地域である。当遺跡が立地する江川流域には談義所遺跡〈48〉，長丁遺跡〈49〉，打出遺跡〈50〉，黒阿弥陀遺跡〈54〉，吉右衛門前遺跡〈55〉などがある。当遺跡の東方に位置する立川流域には向原南遺跡〈10〉，小城北遺跡〈12〉，塚越西遺跡〈16〉，塚越東遺跡〈18〉，塚越南遺跡〈20〉，然山西遺跡〈22〉などが点在している。早期の遺跡では，当遺跡の南西500 mほどにある長丁遺跡や吉右衛門前遺跡で沈線文系の土器が，松葉遺跡で条痕文系の土器がそれぞれ採集されている。また，塚越南遺跡では撚糸文系の土器が採集されており，この時期の遺跡の存在が指摘されている。前期の遺跡は江川流域には少なく，市の確認調査より向山遺跡で前期後半の土器が採集されている。それに対して立川流域にはこの時期の遺跡が多く，立川と飯沼川に挟まれた台地上には16遺跡を数える。塚越南遺跡[4]の調査では前期の土器とともにヤマトシジミやハマグリが出土している。然山西遺跡[5]では，縄文時代前期の竪穴住居跡が36軒確認され，植坊式，黒浜式，



第２図　駒寄溜遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の１「石下」「水海道」）

表１　駒寄溜遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世	番号	遺跡名	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
①	駒寄溜遺跡		○			○			29	迎地遺跡					○		
2	沓掛西浦遺跡		○		○				30	遠西遺跡				○			
3	神明遺跡		○		○		○	○	31	薬師原遺跡					○		
4	三井遺跡		○		○	○			32	大日道遺跡		○					
5	見通遺跡		○		○				33	西高野南遺跡		○		○	○		
6	大日塚遺跡		○		○			○	34	原高野遺跡		○		○	○		
7	根古内塚							○	35	西高野遺跡				○			
8	向原北遺跡		○						36	原遺跡		○					
9	向原中遺跡		○	○	○				37	西高野北遺跡				○	○		
10	向原南遺跡		○	○	○				38	宮内遺跡		○		○	○		
11	猪ノ子遺跡		○		○				39	馬立原遺跡		○				○	○
12	小城北遺跡		○	○	○				40	高山古墳				○			
13	小城南遺跡		○		○	○			41	松葉遺跡		○		○			
14	塚越浦遺跡		○		○				42	西遺跡					○		
15	塚越遺跡				○				43	長右ヱ衛門元屋敷遺跡		○			○		○
16	塚越西遺跡		○						44	新屋敷遺跡				○	○		
17	大杉古墳				○				45	正光院脇遺跡				○	○		
18	塚越東遺跡		○		○		○	○	46	元屋敷遺跡				○			
19	塚越塚遺跡				○				47	榊山古墳				○			
20	塚越南遺跡		○				○		48	談義所遺跡		○		○			
21	然山遺跡		○						49	長丁遺跡		○					
22	然山西遺跡		○		○	○	○		50	打出遺跡		○			○		
23	弓田城跡		○			○	○		51	香取東遺跡		○					
24	駒寄遺跡		○		○				52	角田東遺跡				○	○		
25	馬立中の台遺跡				○				53	宮ノ後遺跡					○		
26	馬立中の台古墳群				○				54	黒阿弥陀遺跡		○			○		
27	浅間塚古墳				○				55	吉右衛門前遺跡		○			○		
28	南開遺跡							○	56	半谷古墳群				○			

浮島式の土器の他に諸磯式の獣面把手が出土している。また，地点貝塚３か所が調査され，50万個を超えるヤマトシジミやハマグリが出土している。中期の遺跡は当遺跡付近では比較的少なく，長丁遺跡や香取東（かとりひがし）遺跡〈51〉，黒阿弥陀遺跡で加曽利Ｅ式の土器が採集されている。立川流域の駒寄（こまよせ）遺跡では阿玉台式や加曽利Ｅ式の土器が出土している。後期の遺跡では，当遺跡の南西900ｍほどにある談義所遺跡で堀之内式や加曽利Ｂ式，安行式の土器が採取されている。また，向原中（むこうばらなか）遺跡〈９〉や小城北遺跡，小城南（こじろみなみ）遺跡〈13〉などでも後期の土器が採集されている。晩期の遺跡は，長丁遺跡や駒寄遺跡で安行式の土器が確認されている。

弥生時代の遺跡は当地域に少なく，当市南東部に位置する姥ヶ谷津遺跡[6)]で住居跡１軒が確認され，高崎貝塚[7)]では住居跡４軒が確認されている。また，小城北遺跡や向原南遺跡，向原中遺跡でもこの時代の遺物が採集されている。

古墳時代の遺跡は，当遺跡付近では談義所遺跡，新屋敷（しんやしき）遺跡〈44〉，正光院脇（しょうこういんわき）遺跡〈45〉，元屋敷（もとやしき）遺跡〈46〉，角田東（つのだひがし）遺跡〈52〉などがある。談義所遺跡では前期から後期にかけての土器が採集されている。また，当遺跡

の東 800 mほどには猪ノ子遺跡〈11〉があり，開墾した際に古墳時代中期の土師器 23 点，手捏土器 30 点，石製模造品 42 点が出土し東京国立博物館に所蔵されている。古墳は，市内に数多く存在したと考えられ，全長約 30 mの前方後円墳と推定されている大杉古墳〈17〉，雲母片岩の箱式石棺が出土した駒寄塚古墳，横穴石室内から人骨とともに直刀，勾玉，管玉などが出土した高山古墳〈40〉などが知られる。また，上出島古墳群[8]の第２号墳は全長 56 mの前方後円墳で，勾玉，管玉，鉄剣，鉄鏃などが出土しただけでなく壺形埴輪の配列も検出され，５世紀前半頃に比定されている。

奈良･平安時代の遺跡は，立川流域では減少しているが，江川流域では西遺跡〈42〉，新屋敷遺跡，正光院脇遺跡，姥ヶ谷津遺跡，迎地遺跡〈29〉，薬師原遺跡〈31〉，宮内遺跡〈38〉などあり，古墳時代に引き続き集落が展開している。宮内遺跡では，古墳時代から平安時代までの住居跡 64 軒が確認され，多量の鉄滓が出土していることから，製鉄工人たちの集落であったと指摘されている[9]。また，長右ヱ衛門元屋敷遺跡[10]〈43〉では９世紀代の須恵器甕に火葬骨が納められた蔵骨器が確認され，蔵骨器は勝田久保北遺跡，入畑遺跡，北ノ妻遺跡でも出土している。中でも，北ノ妻遺跡の蔵骨器は猿投産の灰釉陶器で，この地域に豊かな財力と権勢を得ていた集団の存在が想定されている。なお，律令期における当遺跡周辺は下総国猨嶋郡石井（岩井）郷に属していた。

鎌倉時代のこの地は下河辺荘に属し，下河辺氏によって治められた。その後，15 世紀中頃には古河公方足利氏の支配下となる。戦国時代の城館跡[11]としては大塚城跡や菅生城跡，弓田城跡〈23〉などがある。弓田城の城主は不明であるが，『下總國舊事考』には「同郡湯田（弓田）村ノ故城址ハ北条氏政伊勢備中守ヲシテ守ラシム」[12]とあり，小田原北条氏との関連が推測されている。

江戸時代の享保年間に，広大な沼であった飯沼やその周辺の新田開発が積極的に行われた。新田の維持や改良は明治時代以降も続けられ，現在も豊かな水田地帯が広がっている。

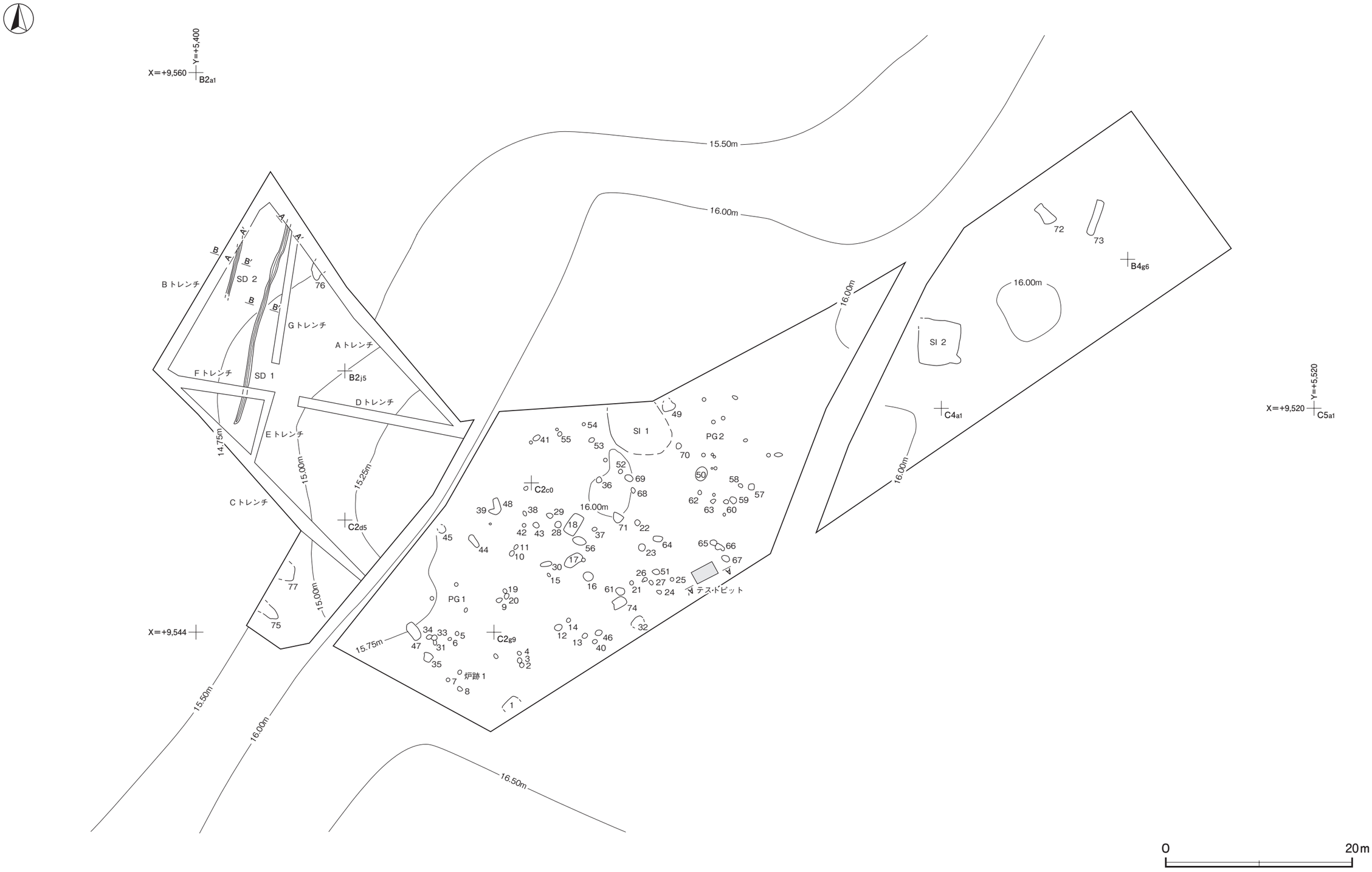
※文中の〈　〉内の番号は，第２図及び表１の当該番号と同じである。なお，本章は『財団報告書』第 359 集を基にし，若干加筆したものである。

註

１）大森雅之「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　原口遺跡・北前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 83 集　1993 年３月
２）鶴見貞雄「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　高崎貝塚」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 88 集　1994 年３月
３）中村敬治「岩井幸田工業団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書　姥ヶ谷津遺跡　南開遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 89 集　1994 年３月
４）西村正衛「石器時代における利根川下流域の研究　－貝塚を中心として－」早稲田大学出版部　1984 年 12 月
５）公益財団法人茨城県教育財団「埋蔵文化財　年報 31」 2012 年６月
６）註３に同じ
７）註２に同じ
８）岩井市教育委員会『上出島古墳群』 1975 年３月
９）小林和彦　宮崎剛「宮内遺跡　国道 354 号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 359 集　2012 年３月
10）註５に同じ
11）茨城県教育委員会『重要遺跡調査報告書Ⅱ(城館跡)』 1985 年３月
12）岩井市史編さん委員会『岩井市史　考古編』 岩井市　1999 年３月

参考文献

・茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査　水海道』 1985 年 12 月
・岩井市史編さん委員会『岩井市史　考古編』岩井市　1999 年３月
・岩井市史編さん委員会『岩井市史　通史編』岩井市　2001 年３月
・猿島町史編さん委員会『猿島町史　通史編』猿島町　1998 年３月
・猿島町史編さん委員会『猿島町史　資料編　原始・古代・中世』 猿島町　1993 年３月



第３図　駒寄溜遺跡遺構全体図

第3章　調　査　の　成　果

第1節　調 査 の 概 要

駒寄溜遺跡は，市の中央部を南流する江川左岸から延びる支谷に沿った標高 15 ～ 17 mの台地縁辺部に立地している。遺構の配置や周囲の地形などから，遺跡は東側の台地上に広がると考えられる。調査区は遺跡の西部に位置しており，東西約 100 m，南北約 60 mほどで，江川左岸から台地内部へと延びた「富田の谷」または「坊谷津」と呼ばれる谷部へ向かって緩やかに傾斜している。調査面積は 2,878㎡で，調査前の現況は台地上は畑地及び山林で，低地は水田として利用されている。

調査の結果，竪穴住居跡２軒（縄文・平安），炉跡１か所（縄文），遺物包含層１か所（縄文）の他に，時期不明の土坑 77 基，溝跡２条，ピット群２か所を確認した。

遺物は，遺物収納コンテナ（60 × 40 × 20㎝）に５箱出土している。主な出土遺物は，縄文土器（深鉢･浅鉢）土師器（坏・坩・甕），須恵器（坏・甕），土師質土器（小皿），陶磁器（天目茶碗・擂鉢・皿類・碗類・瓶類・鉢類・甕類），土製品（支脚），石器・石製品（鏃・石皿・敲石・砥石・双孔円板），椀状滓などである。

第2節　基　本　層　序

調査区中央部の台地縁辺部の緩斜面（Ｃ３e4 区）にテストピットを設定し，地表面から 1.9 mほど掘り下げて基本土層の観察を行った（第４図）。土層は７層に分層でき，観察結果は以下のとおりである。

第１層は，極暗褐色を呈する耕作土である。ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含み，粘性・締まりはともに普通である。

第２層は，褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりはともに普通で，層厚は６～ 17cm である。

第３層は，褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で，締まりは強く，層厚は７～ 35cm である。

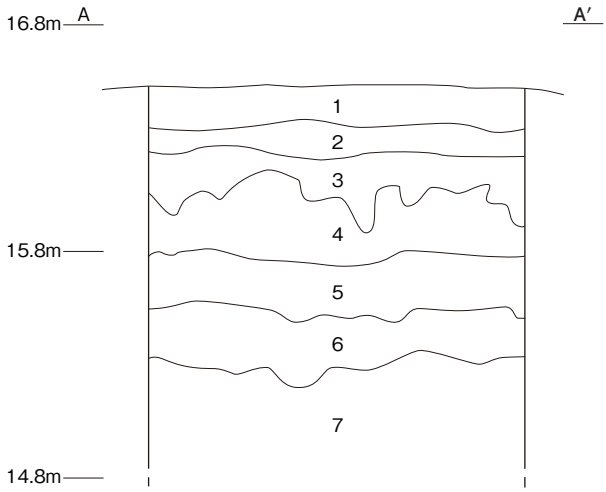
第４層は，暗褐色を呈するハードローム層である。ガラス質粒子を微量含み，粘性は普通で，締まりは強く，層厚は 15 ～ 41cm である。第Ⅱ黒色帯上層に相当すると考えられる。

第５層は，暗褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で，締まりは強く，層厚は 21 ～ 34cm である。第Ⅱ黒色帯下層に相当すると考えられる。

第６層は，にぶい褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く，層厚は 18 ～ 29cm である。

第７層は，明褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強い。確認した層厚は 36 ～ 53cm であるが，下層は未掘のため不明である。

なお，遺構は第２層の上面で確認できた。



第４図　基本土層図

第3節 遺 構 と 遺 物

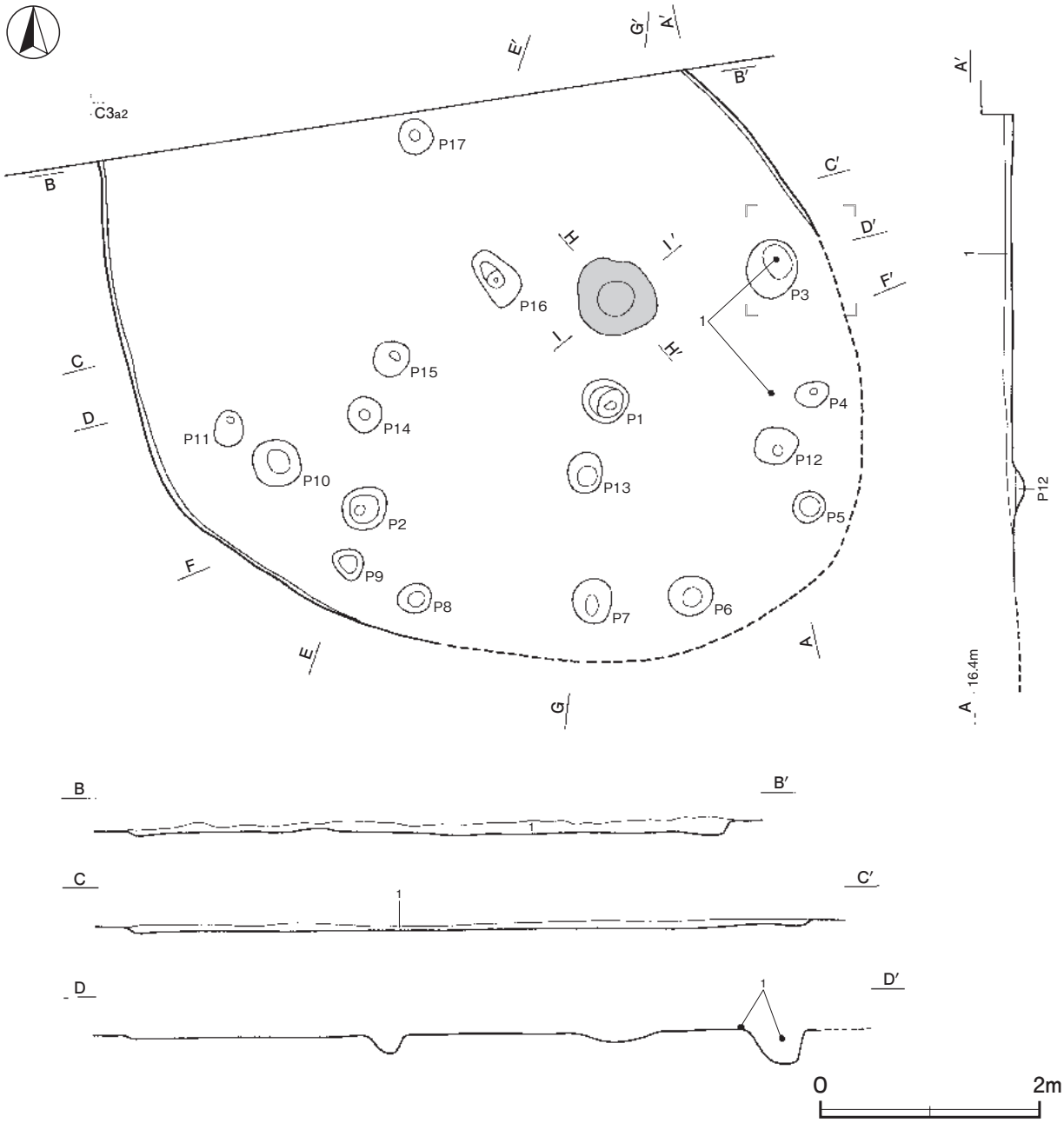
1　縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，竪穴住居跡１軒，炉跡１基，遺物包含層１か所を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

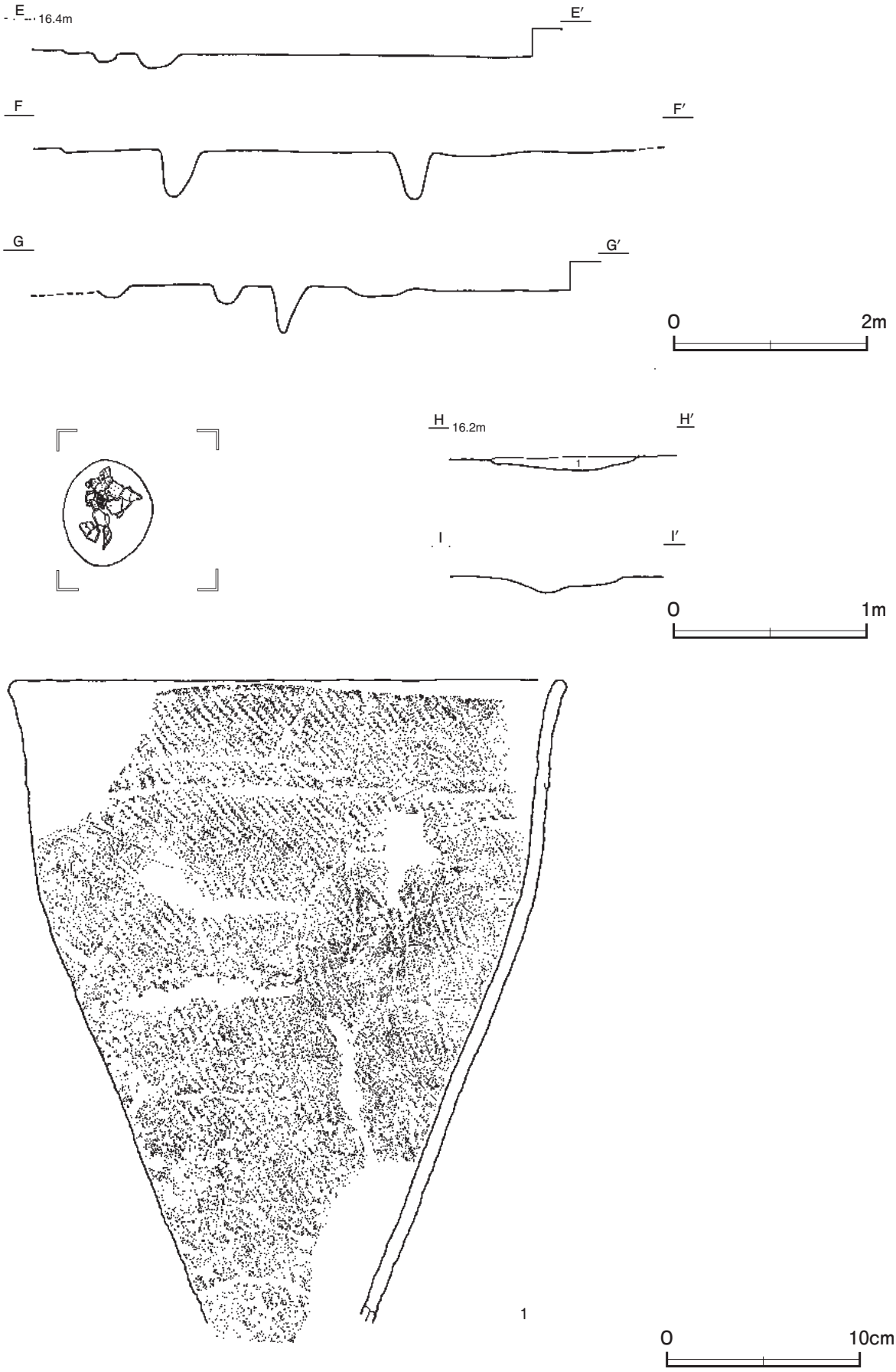
(1)　竪穴住居跡

第１号住居跡（第５・６図）

位置　調査区中央部のＣ３a2 区，標高 16 mほどの台地緩斜面部に位置している。



第５図　第１号住居跡実測図



第６図　第１号住居跡・出土遺物実測図

規模と形状　北部が調査区域外へ延びているため，東西径は6.44ｍで，南北長は5.39ｍしか確認できなかった。平面形は楕円形と推定でき，長径方向はＮ－24°－Ｗである。壁高は６～７㎝で外傾して立ち上がっている。

床　平坦で，硬化面は認められない。

炉　東部に付設されている。長径79㎝，短径66㎝の楕円形で，床面を９㎝ほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火を受けてわずかに硬化しているが赤変部分は認められない。

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック少量，炭化粒子微量

ピット　17か所。Ｐ１・Ｐ２は深さ49㎝・48㎝で，規模と配置から主柱穴と考えられる。Ｐ３～Ｐ11は深さ12～25㎝で，壁に沿って環状に巡っていることから壁柱穴と考えられる。Ｐ12～Ｐ17は深さ15～22㎝で，性格不明である。

覆土　単一層である。含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子極微量

遺物出土状況　縄文土器片52点（深鉢）のほかに剥片３点（黒曜石），礫１点が出土している。１は東部の床面やＰ３の覆土中層から出土した破片が接合したものである。

所見　時期は，出土土器から中期中葉に比定できる。

第１号住居跡出土遺物観察表（第６図）

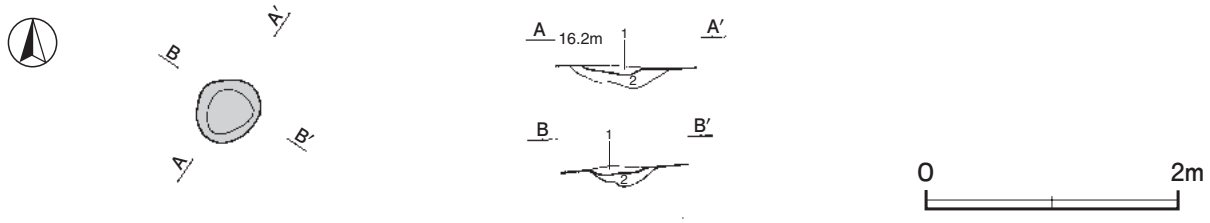
番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	縄文土器	深鉢	［28.2］	（33.1）	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	RLの単節縄文　胴部上位に輪積痕	床面～Ｐ３覆土下層	40%　PL5

(2)　炉跡

第１号炉跡（第７図）

位置　調査区南部のＣ２h8区，標高16ｍほどの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状　長径0.54ｍ，短径0.48ｍの楕円形で，底面は凸凹である。壁は緩やかに立ち上がっている。長径方向はＮ－33°－Ｅである。



第７図　第１号炉跡実測図

覆土　単一層である。第１層は均質な含有物であることから自然堆積と考えられる。第２層は掘方への埋土である。土層観察から，第２層上面が火熱を受けやや硬化しており，火床面と考えられる。赤変部分は認められない。

土層解説

1　暗 赤 褐 色　焼土粒子・炭化粒子少量，ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

所見　時期は，遺物が出土していないため不明であるが，形状から縄文時代と考えられる。

(3)　遺物包含層

第１号遺物包含層（第８～12図）

位置　調査区西部のＢ２e2～Ｃ２e5区，標高15ｍ前後の緩斜面部に位置している。

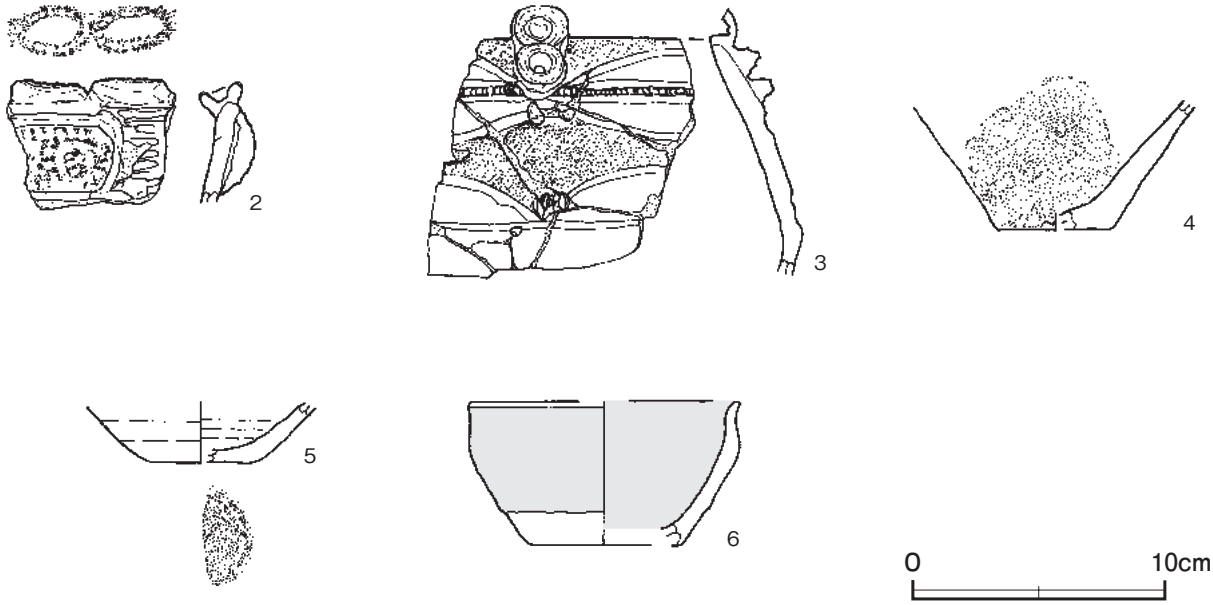
重複関係　第76号土坑，第１・２号溝に掘り込まれている。

確認状況　調査区の表土を除去した段階で，西部のＢ２h4区を中心とする緩斜面部に，土器片を含む黒色や暗褐色の土が堆積していることを確認した。遺物が検出された範囲は東西21ｍ，南北30ｍほどであるが，遺物の出土状況や地形の形状から遺物を包含する層は北部，東部や西部の調査区域外に延びていると考えられる。

土層　９層に分層できる。遺物を包含している層は，現地表面から0.6～0.9ｍに堆積している黒色，暗褐色や黄褐色の第６・７・９層である。層厚は，最深部で45㎝である。第９層以下も土砂の流入によって堆積した自然堆積土であるが，遺物は検出されなかった。

土層解説

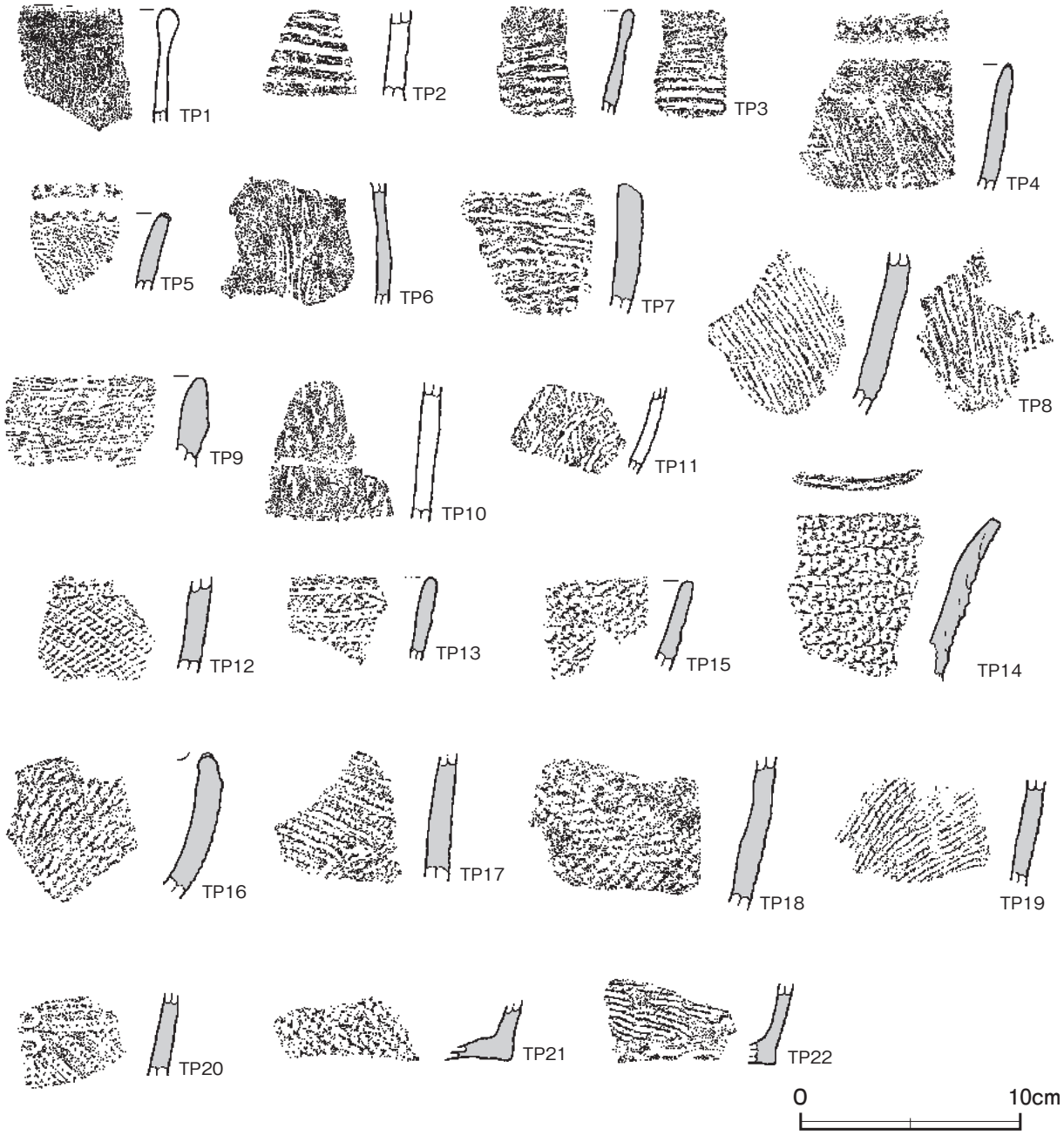
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化物微量
2　極 暗 褐 色　ローム粒子少量，粘土粒子・鉄分微量
3　褐　　色　ロームブロック少量
4　黒　　色　ローム粒子・粘土粒子微量
5　黒　褐　色　粘土粒子少量，ローム粒子微量
6　黒　　色　粘土粒子少量，ローム粒子微量
7　暗　褐　色　ロームブロック・粘土粒子少量
8　暗　褐　色　ロームブロック中量，粘土粒子微量
9　黄　褐　色　粘土粒子中量，ローム粒子・砂粒少量



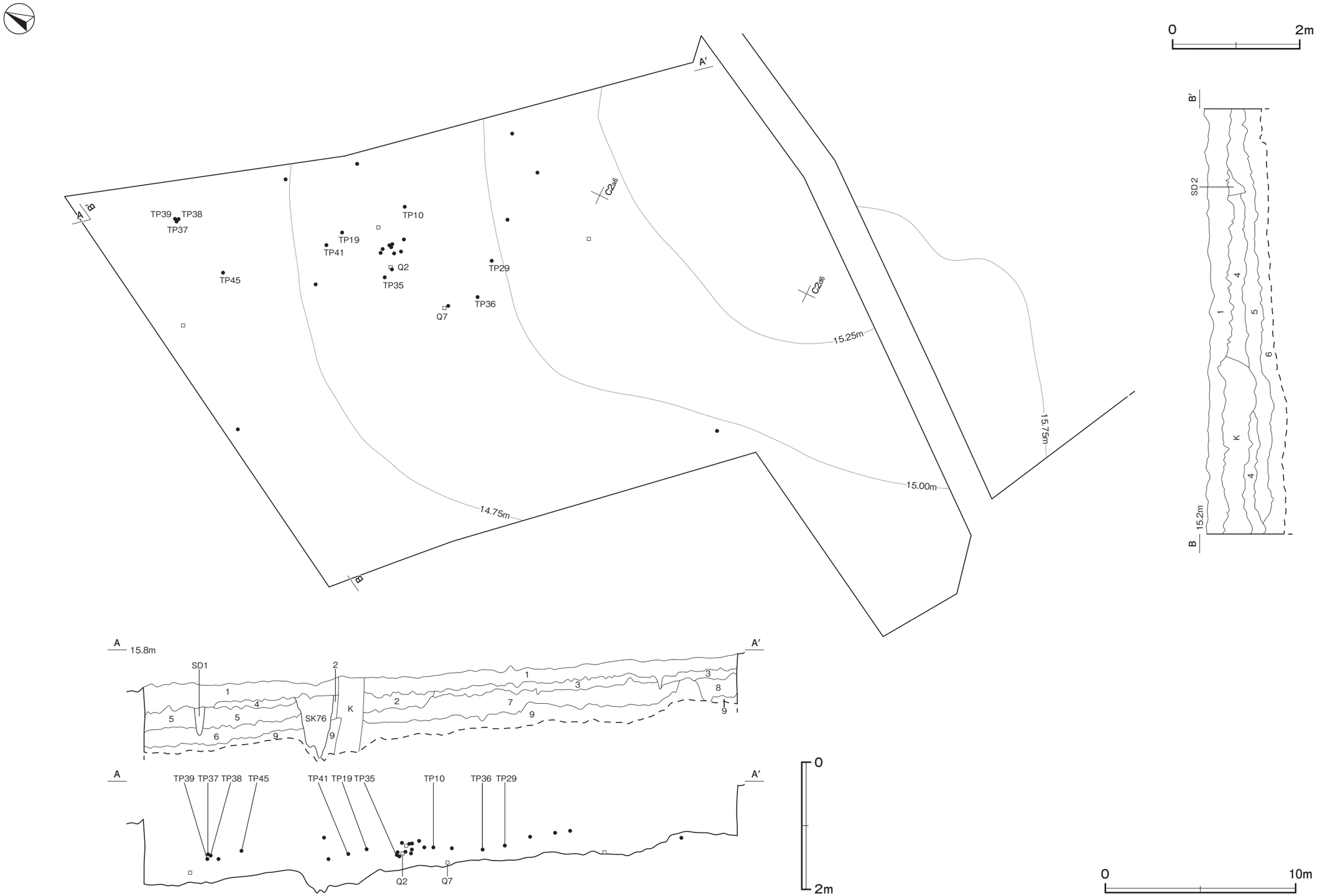
第８図　第１号遺物包含層出土遺物実測図（１）

遺物出土状況　縄文土器片 855 点（深鉢類 853，浅鉢２），石器５点（鏃２，石皿１，敲石２），石核１点 (チャート)，剥片７点（安山岩１，チャート６），礫 26 点の他に，土師器片２点（坩，甕），土師質土器片１点（小皿），陶器片 15 点（天目茶碗１，擂鉢１，皿類４，碗類１，瓶類３，鉢類１，甕類４），磁器片 10 点（皿類６，碗類２，瓶類２），瓦質土器片２点（焙烙ヵ），砥石１点，椀状滓１点が出土している。縄文時代早期から後期にかけての土器片が出土しており，前期のものが主体である。遺物の多くはＢ２h4 区を中心として出土しており，出土層位は第７層に集中しているが，大部分は細片である。

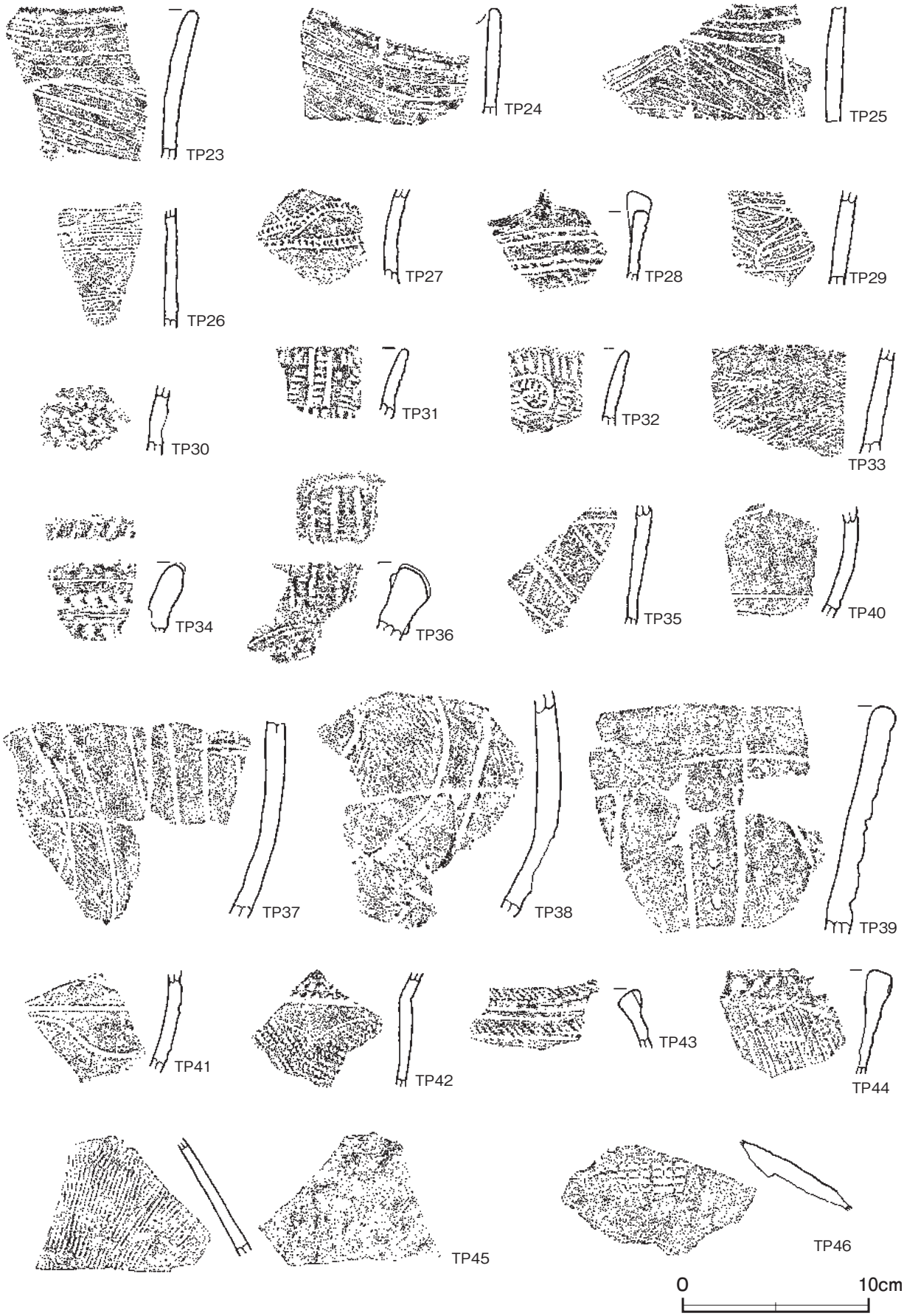
所見　土層観察や遺物の出土状況から，包含層は台地上から土砂と共に遺物が流れ込んで形成されたと考えられる。また，出土土器から，縄文時代の早期前半から遺物が流入しはじめ，後期後葉にはほぼ埋没したものと考えられる。周辺の土地の利用状況などから，長期にわたって水田や畑地として利用されていたことが想定され，陶磁器類などの遺物はその時点で混入したと考えられる。



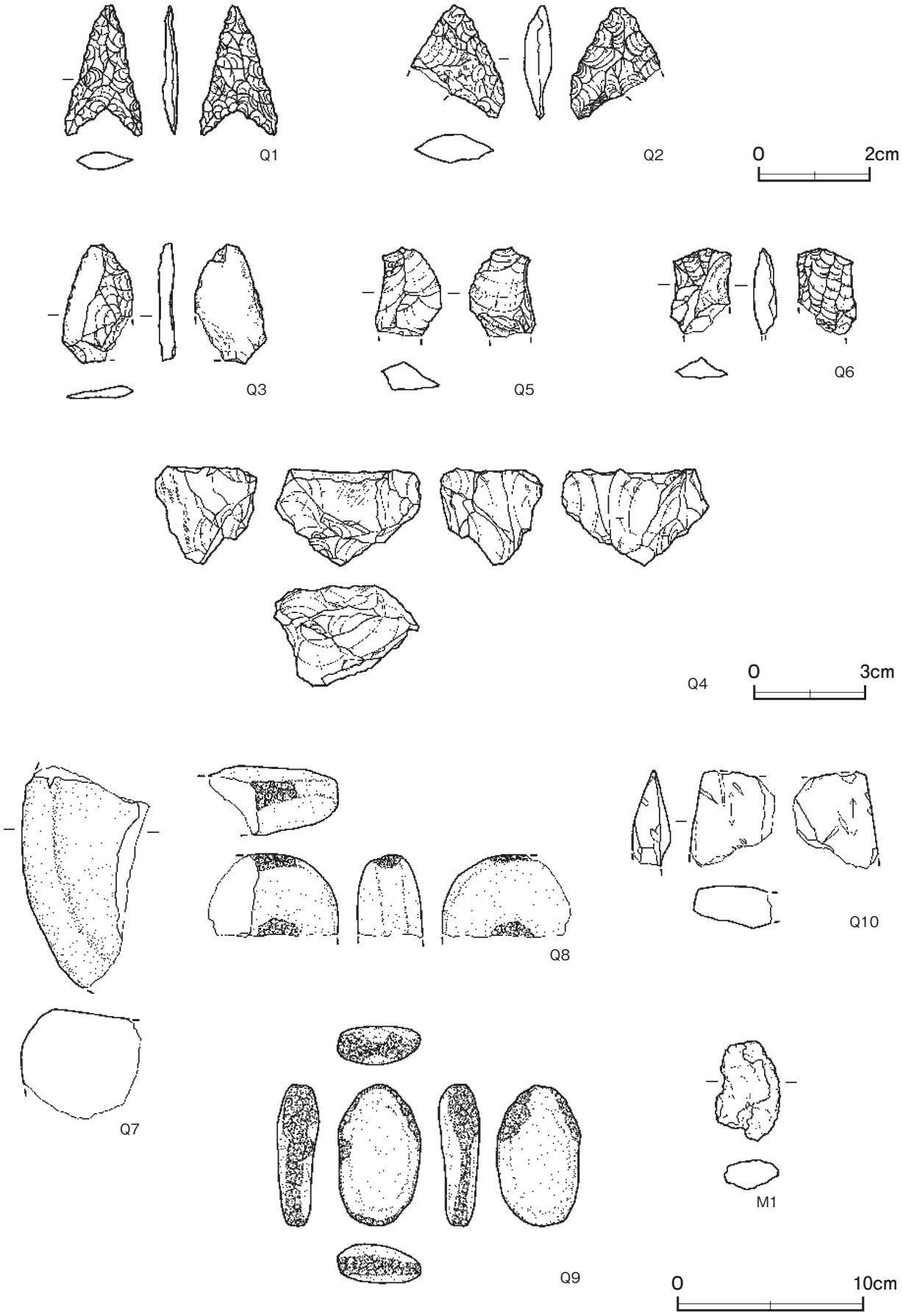
第９図　第１号遺物包含層出土遺物実測図（２）



第 10 図　第 1 号遺物包含層実測図



第 11 図　第１号遺物包含層出土遺物実測図（３）



第 12 図　第 1 号遺物包含層出土遺物実測図（4）

第１号遺物包含層出土遺物観察表（第８・９・11・12図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
2	縄文土器	深鉢	－	(5.2)	－	長石・石英	橙	普通	細い粘土紐による隆帯　口唇部に刻みを持つ隆帯	包含層中	５％　PL5
3	縄文土器	浅鉢	－	(10.3)	－	長石・石英	褐灰	普通	８字状文　沈線による区画後ＬＲの単節縄文を充填　沈線文間を磨り消し	包含層中	５％　PL5
4	縄文土器	深鉢	－	(5.1)	[4.4]	長石・石英	にぶい橙	普通	斜位の磨き	包含層中	10％
5	土師質土器	小皿	－	(2.4)	[4.0]	長石・石英	浅黄橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切りｯ	包含層中	30％
6	陶器	天目茶碗	[10.4]	5.7	－	精良	にぶい赤褐	良好	体部外・内面鉄釉	包含層中	15％

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰黄褐	撚糸文	包含層中	PL6
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	沈線文	包含層中	PL6
TP 3	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい橙	外・内面に条痕文	包含層中	PL6
TP 4	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい橙	口唇部押圧　外面に条痕文	包含層中	
TP 5	縄文土器	深鉢	長石・繊維	にぶい橙	口唇部押圧　外・内面に条痕文	包含層中	
TP 6	縄文土器	深鉢	長石・赤色粒子・繊維	にぶい赤褐	撚糸文	包含層中	PL6
TP 7	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい赤褐	撚糸文	包含層中	PL6
TP 8	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	橙	外・内面に条痕文	包含層中	
TP 9	縄文土器	深鉢	長石・繊維	にぶい赤褐	外・内面に条痕文　貝殻腹縁文	包含層中	PL6
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	撚糸文	覆土中層	PL6
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	ＲＬの単節縄文　結節文	包含層中	PL6
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・繊維	赤褐	結節沈線文　ＲＬＲの複節縄文　附加条	包含層中	PL6
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい褐	ＬＲの単節縄文　半截竹管による爪形文	包含層中	PL6
TP14	縄文土器	深鉢	長石・繊維	にぶい黄橙	ループ文	包含層中	PL6
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい橙	ＲＬの単節縄文　結節文	包含層中	PL6
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい赤褐	口唇部に押圧　ＬＲの単節縄文	包含層中	PL6
TP17	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい黄橙	ＲＬの単節縄文　附加条	包含層中	
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい褐	ＬＲの単節縄文	包含層中	
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい黄橙	Ｌの無節縄文	覆土中層	
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	黒褐	円形竹管文　半截竹管による爪形文	包含層中	PL6
TP21	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	明赤褐	ＲＬの単節縄文	包含層中	
TP22	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい橙	Ｒの無節縄文	包含層中	
TP23	縄文土器	深鉢	長石・石英	明褐	平行沈線文	包含層中	
TP24	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	平行沈線文	包含層中	PL6
TP25	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	平行沈線文	包含層中	
TP26	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	平行沈線文	包含層中	PL6
TP27	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	半截竹管による爪形文	包含層中	PL6
TP28	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	半截竹管による爪形文	包含層中	PL6
TP29	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	半截竹管による木葉状文	覆土下層	PL6
TP30	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	三角刺突文	包含層中	
TP31	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰黄褐	棒状工具による押圧　沈線文　三角形の抉り込み	包含層中	
TP32	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰黄褐	棒状工具による押圧　沈線文　三角形の抉り込み	包含層中	PL6
TP33	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰黄褐	横位の綾繰文	包含層中	
TP34	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	口唇部に刻み　連続する刺突文	包含層中	
TP35	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	平行沈線文	覆土下層	
TP36	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	口縁部に結節沈線文　把手部に押圧	覆土下層	
TP37	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	沈線間に磨り消し縄文	覆土中層	PL6
TP38	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰白	沈線間に磨り消し縄文	覆土中層	
TP39	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	沈線間に列点文	覆土中層	PL6

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP40	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	沈線による横区画描出　ＬＲの単節縄文	包含層中	
TP41	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	沈線による横区画描出　ＬＲの単節縄文	覆土中層	PL6
TP42	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	三角区画文　半弧状の沈線文　ＲＬの単節縄文	包含層中	PL6
TP43	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	口縁部に帯縄文	包含層中	PL6
TP44	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	隆起帯に押圧　条線文	包含層中	PL6
TP45	須恵器	甕	長石・石英	灰	外面縦位の平行叩き　内面の当て具痕を磨り消し　自然釉	覆土中層	
TP46	陶器	甕	長石	灰	外面に格子状のスタンプ　内面剥離　自然釉	覆土中層	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Ｑ１	鏃	2.3	1.4	0.3	0.6	チャート	凹基無茎鏃　両面押圧剥離	包含層中	PL6
Ｑ２	鏃	1.5	(1.2)	0.5	(1.1)	黒曜石	凹基無茎鏃　両面押圧剥離　一部欠損	覆土中層	PL6
Ｑ３	剥片	3.2	(1.9)	0.5	(2.2)	チャート	縦長剥片　押圧剥離　鏃未製品ヵ	包含層中	
Ｑ４	石核	2.6	4.0	2.7	24.6	チャート	上面に自然面を残した石核　剥片剥離毎に打面を転移	包含層中	
Ｑ５	剥片	(2.4)	1.7	0.8	(2.9)	チャート	縦長剥片　主要剥離面の剥離方向に対し同一方向・横方向からの剥離　一部欠損	包含層中	
Ｑ６	剥片	(2.3)	1.6	0.6	(2.1)	チャート	横長剥片　調整を伴う不規則な剥離後打面転移	包含層中	
Ｑ７	石皿	(12.0)	(7.0)	(5.9)	(553)	凝灰岩	表面に使用痕	覆土下層	
Ｑ８	敲石	(5.5)	(7.0)	3.6	(140.6)	安山岩	磨石兼用　上端及び両面に敲打痕	包含層中	
Ｑ９	敲石	7.6	4.5	2.2	95.8	砂岩	側縁部に敲打痕	包含層中	
Ｑ10	砥石	(5.2)	(4.6)	2.2	(53.2)	凝灰岩	砥面２面	包含層中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Ｍ１	椀状滓	5.4	3.5	1.6	26.5	鉄	破片	覆土中	

２　平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，竪穴住居跡１軒を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

竪穴住居跡

第２号住居跡（第 13・14 図）

位置　調査区東部のＢ３j0 区，標高 16 mほどの緩斜面部に位置している。

規模と形状　長軸 4.82 m，短軸 4.31 mの方形で，主軸方向はＮ－ 93°－Ｅである。壁高は４～８cm で，外傾して立ち上がっている。

床　平坦で，中央部が踏み固められている。中央部や竈付近で炭化材を，南西部で焼土塊を確認した。

竈　南東コーナー部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 101cm で，燃焼部幅は 51cm である。袖部は地山を掘り残して基部とし，その上に砂質粘土混じりのロームを主体とした第 13 ～ 15 層を積み上げて構築されている。火床部は床面から 10cmほどくぼんでいるが，赤変や硬化は確認できなかった。煙道部は壁外に 55cm 掘り込まれ，火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

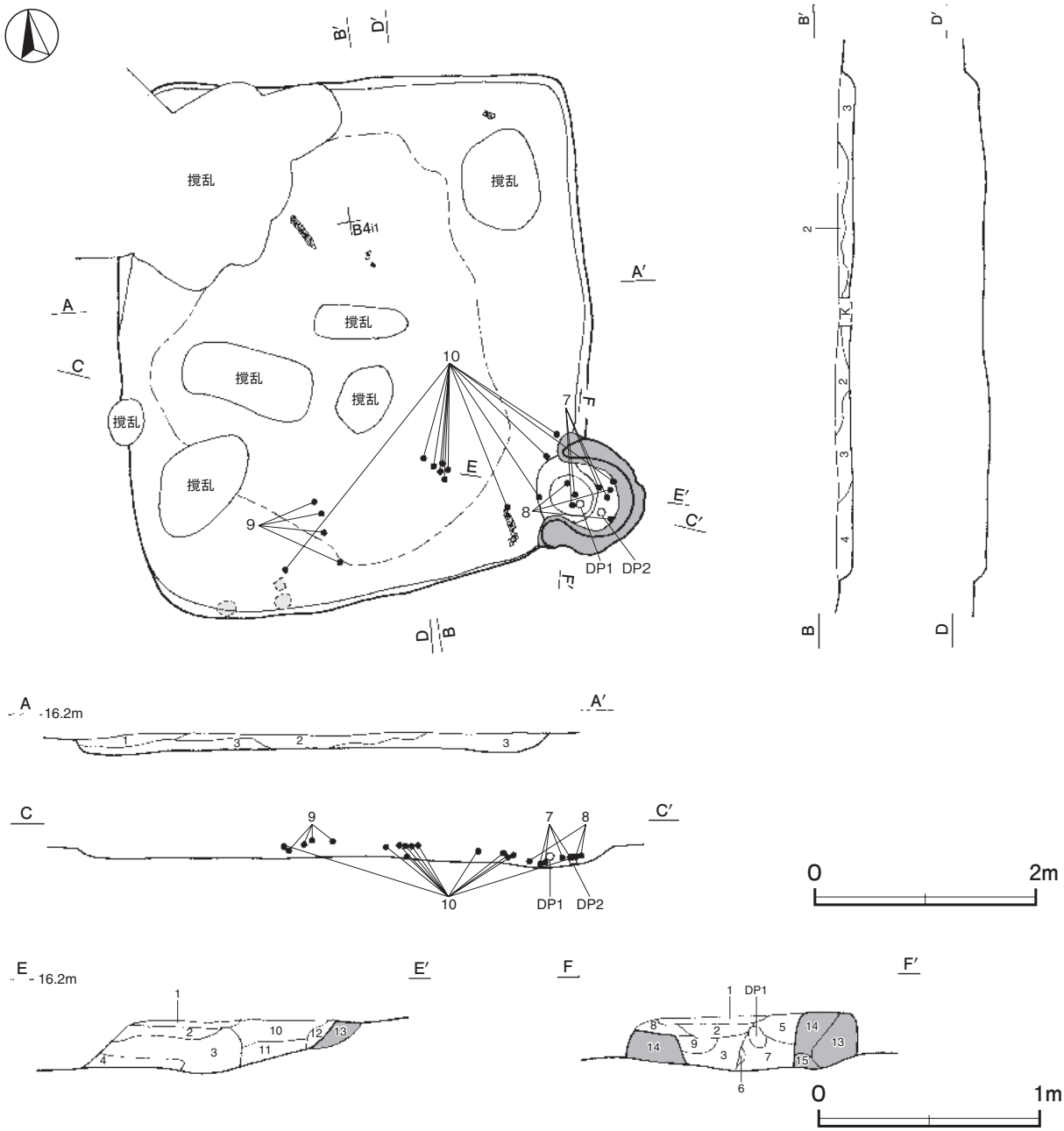
1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量
2　黒　褐　色　炭化物少量，ロームブロック・焼土粒子・砂質粘土粒子微量
3　にぶい黄褐色　焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子・砂質粘土粒子微量
4　暗　褐　色　焼土粒子・炭化粒子少量，ロームブロック・砂質粘土粒子微量
5　暗　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
6　暗 赤 褐 色　焼土ブロック多量，砂質粘土粒子少量
7　にぶい黄褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子・砂質粘土粒子微量
8　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
9　褐　　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量

10　暗　褐　色　焼土ブロック・炭化物・ローム粒子・砂質粘土粒子微量
11　暗　褐　色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
12　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
13　暗　褐　色　砂質粘土ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
14　暗 赤 褐 色　焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量，炭化物・ローム粒子少量
15　暗　褐　色　砂質粘土ブロック少量，焼土ブロック・ローム粒子微量

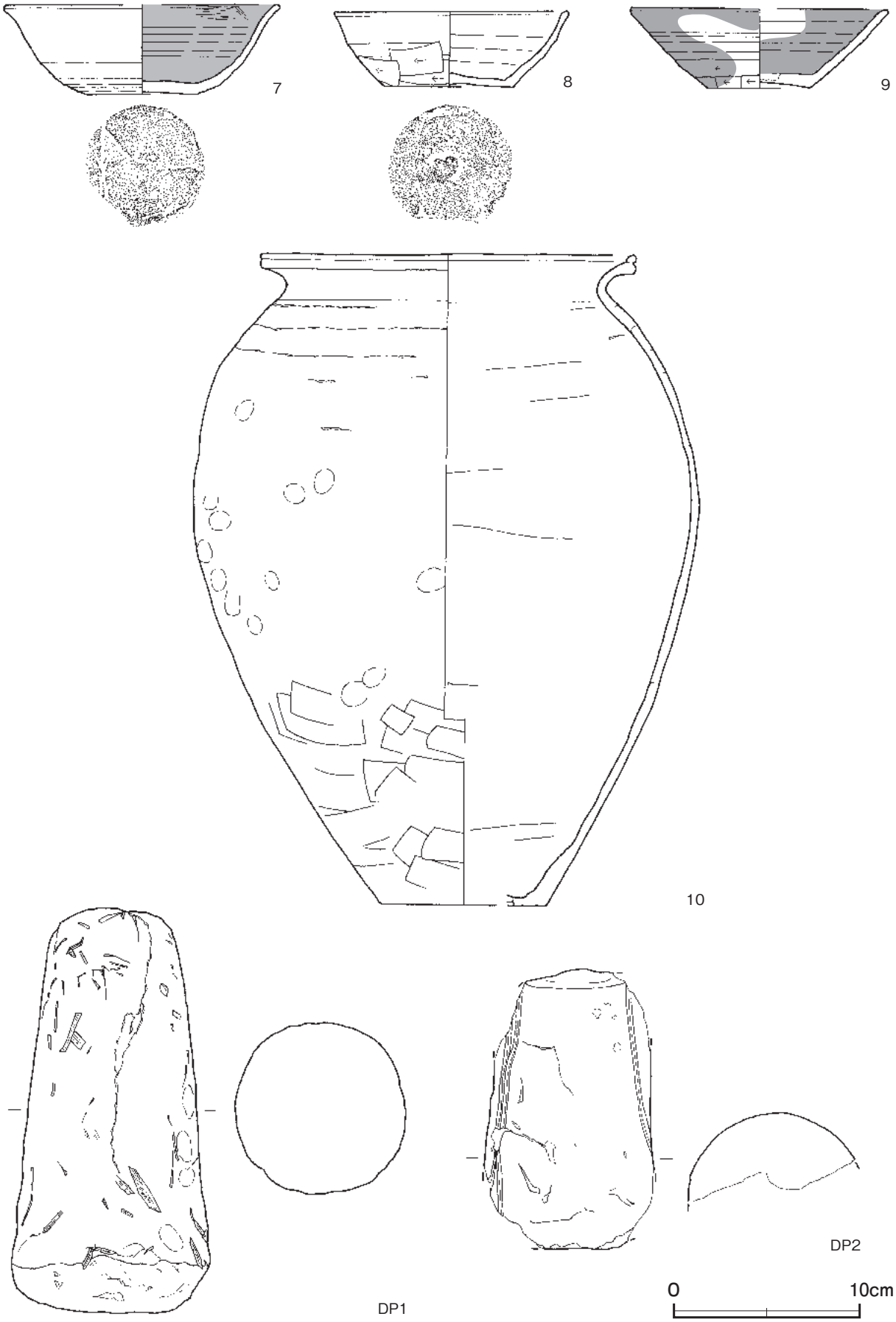
覆土　４層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ，不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量
2　黒　　色　ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化物・焼土粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量



第 13 図　第２号住居跡実測図



第 14 図　第２号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片６点（坏５，甕１），須恵器片13点（坏），土製品２点（支脚），礫１点が竈寄りの床面を中心に出土している。また，混入した縄文土器片３点（深鉢）も出土している。５・６は竈内の煙道部近くで出土した破片がそれぞれ接合したものである。７は中央部の覆土上層や南西部の覆土上層から出土した破片が接合したものである。８は南西部と南東部の覆土上層，竈の焚き口部や煙道部から出土した破片が接合したものである。DP １・DP ２は竈の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から９世紀後葉に比定できる。遺物は竈から出土したものも含めて床面より高い位置で確認されている。また，炭化材や焼土塊も床面より高い位置で散在するように確認されていることから，埋め戻しの過程で土器とともに投棄されたと考えられる。竈の火床部を精査したが赤変や硬化は確認されなかったこと，竈材の砂質粘土の出土量が少ないことなどから，住居廃絶に伴い竈を壊したものと考えられる。

第２号住居跡出土遺物観察表（第14図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
7	土師器	坏	[14.6]	4.8	6.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	内面ヘラ磨き　底部回転ヘラ削り	竈覆土上層	60%　PL5
8	須恵器	坏	12.4	4.1	6.8	長石・石英	にぶい黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	竈覆土上層	60%　PL5
9	須恵器	坏	[13.8]	(4.3)	[5.4]	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部ヘラ削り	覆土上層	60%　PL5
10	土師器	甕	19.9	(35.0)	[9.0]	長石・石英	赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部外面下位ヘラ削り内面ヘラナデ　輪積痕　指頭痕	覆土上層・竈覆土上層	60%　PL5

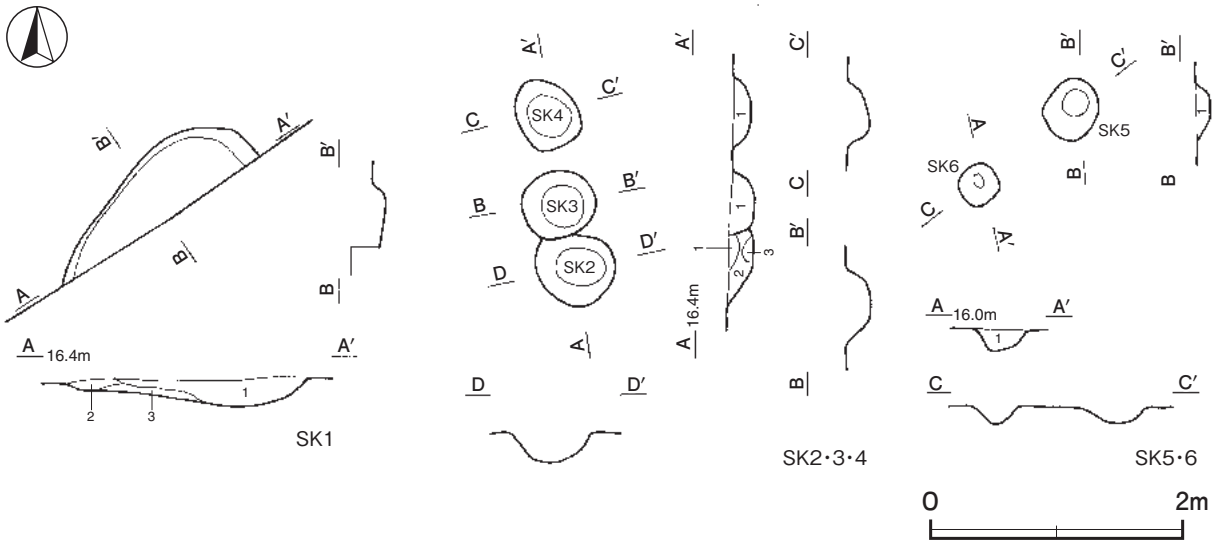
番号	器　種	最小径	最大径	高さ	重量	胎　土	特　　徴	出土位置	備　考
DP 1	支脚	5.1	10.8	21.8	2001	長石・石英	ナデ調整　指頭痕　繊維状の圧痕	竈覆土上層	PL5
DP 2	支脚	(5.4)	(9.2)	15.1	(500)	長石・石英	ナデ調整	竈覆土上層	

３　その他の遺構と遺物

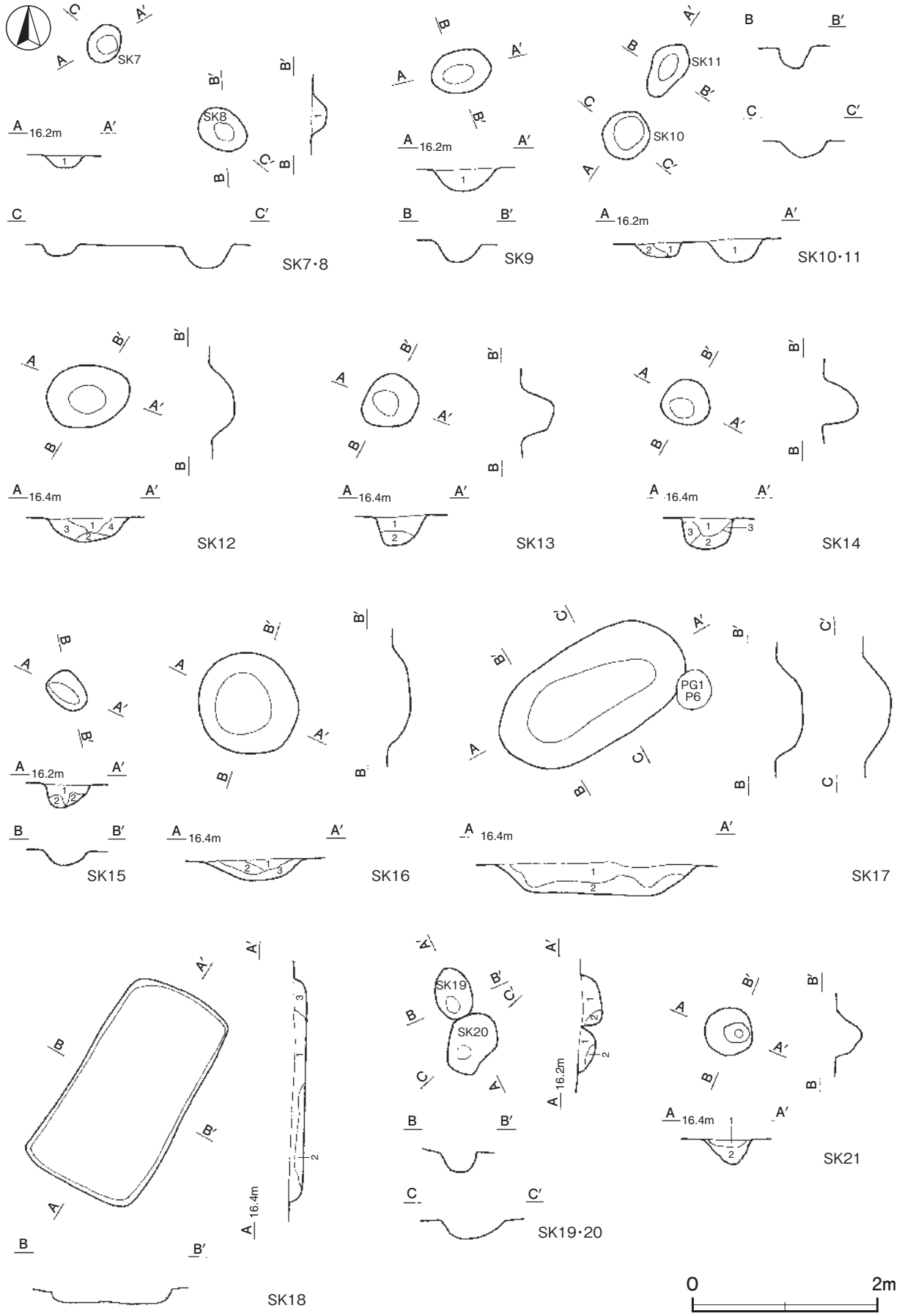
今回の調査では，時期を明らかにすることができなかった土坑77基，溝跡２条，ピット群２か所を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

(1)　土坑（第15～21図）

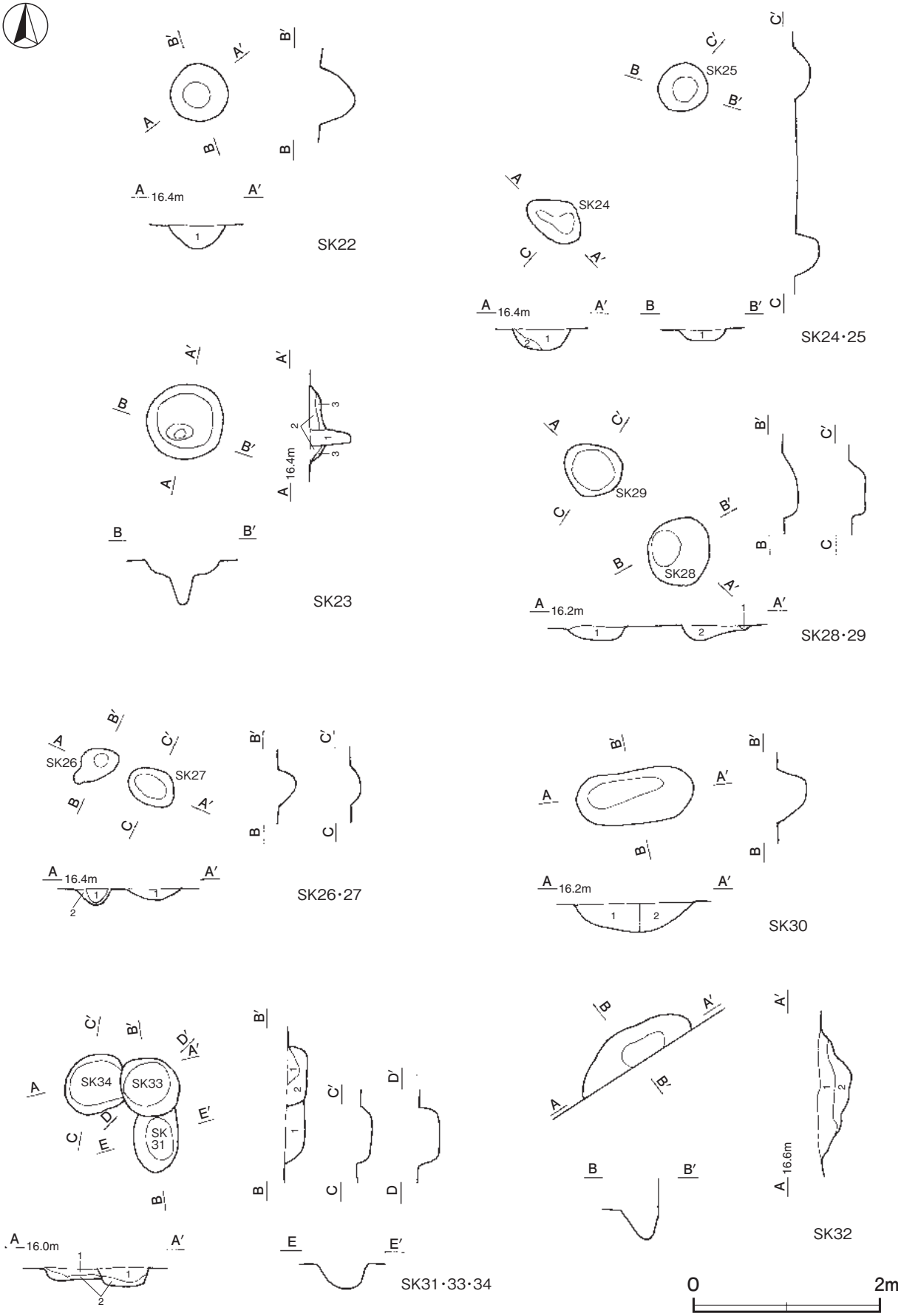
土坑については，実測図と一覧表で示し，併せて土層解説を記載する。



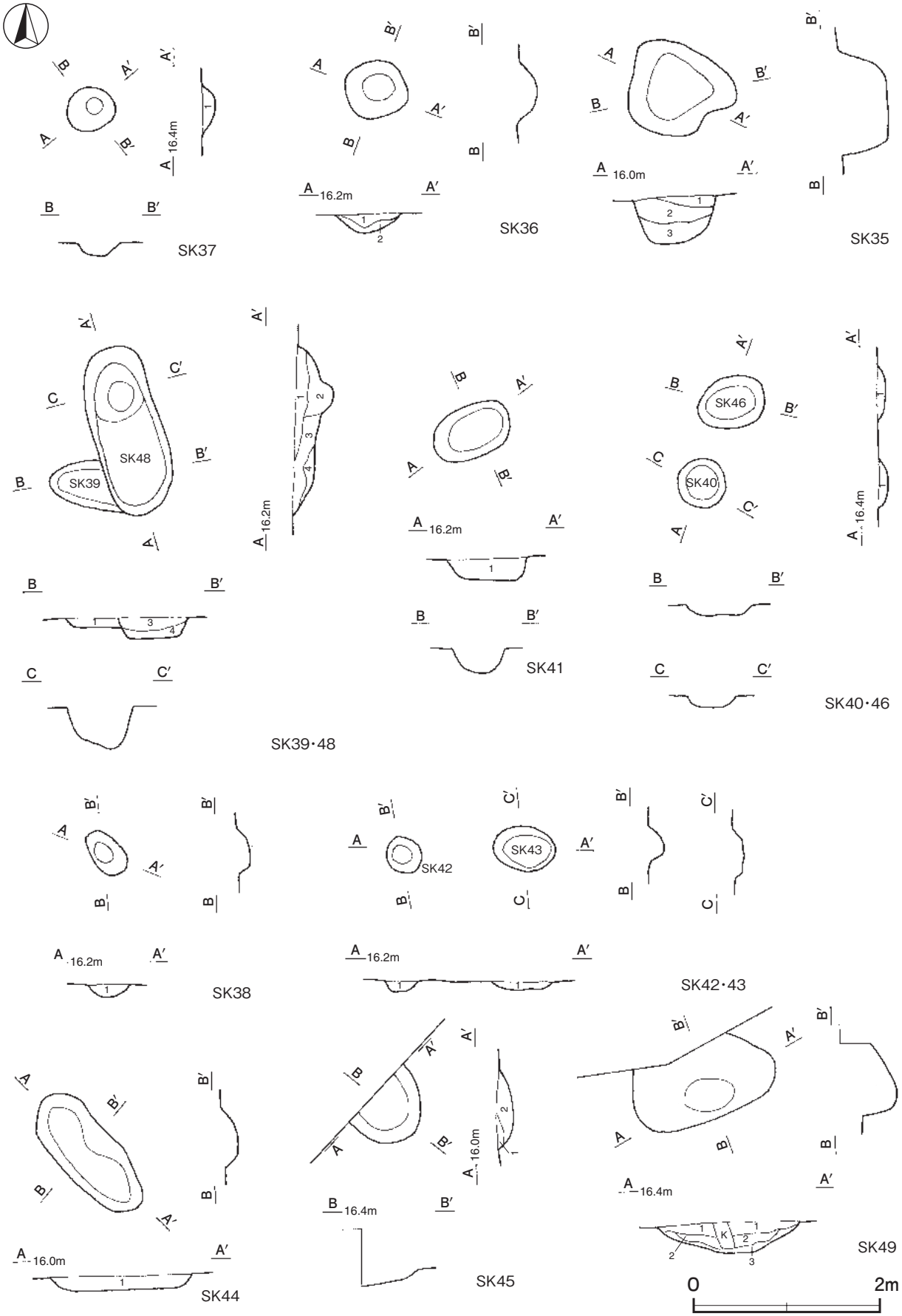
第15図　土坑実測図（１）


SK7
SK8
SK7・8
SK9
SK11
SK10
SK10・11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK16
PG1
P6
SK17
SK18
SK19
SK20
SK19・20
SK21
16.2m
16.4m
0
2m

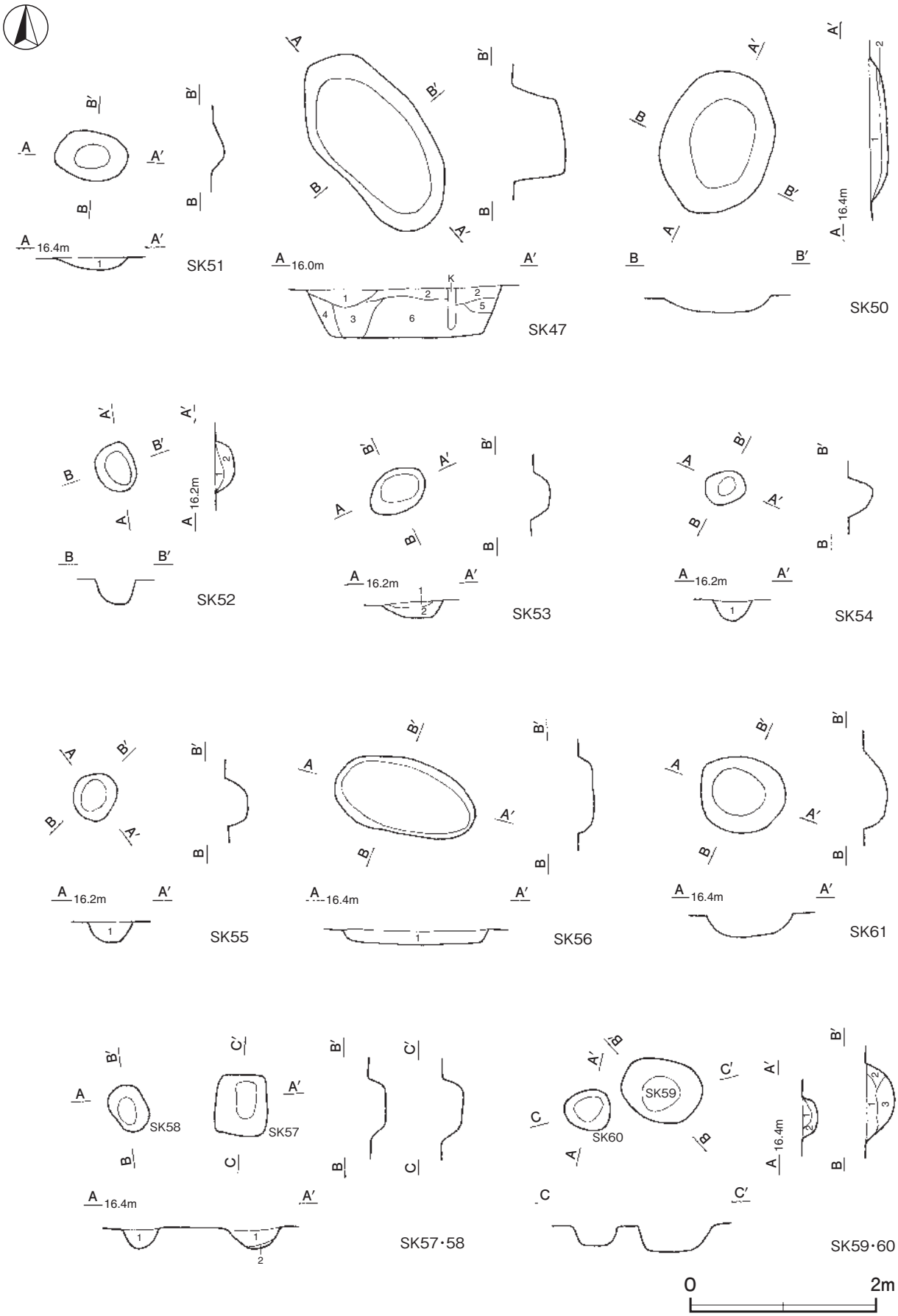
第 16 図　土坑実測図（2）


SK22
SK24
SK25
SK24・25
SK23
SK29
SK28
SK28・29
SK26
SK27
SK26・27
SK30
SK34
SK33
SK31
SK31・33・34
SK32
16.4m
16.2m
16.0m
16.6m
0
2m

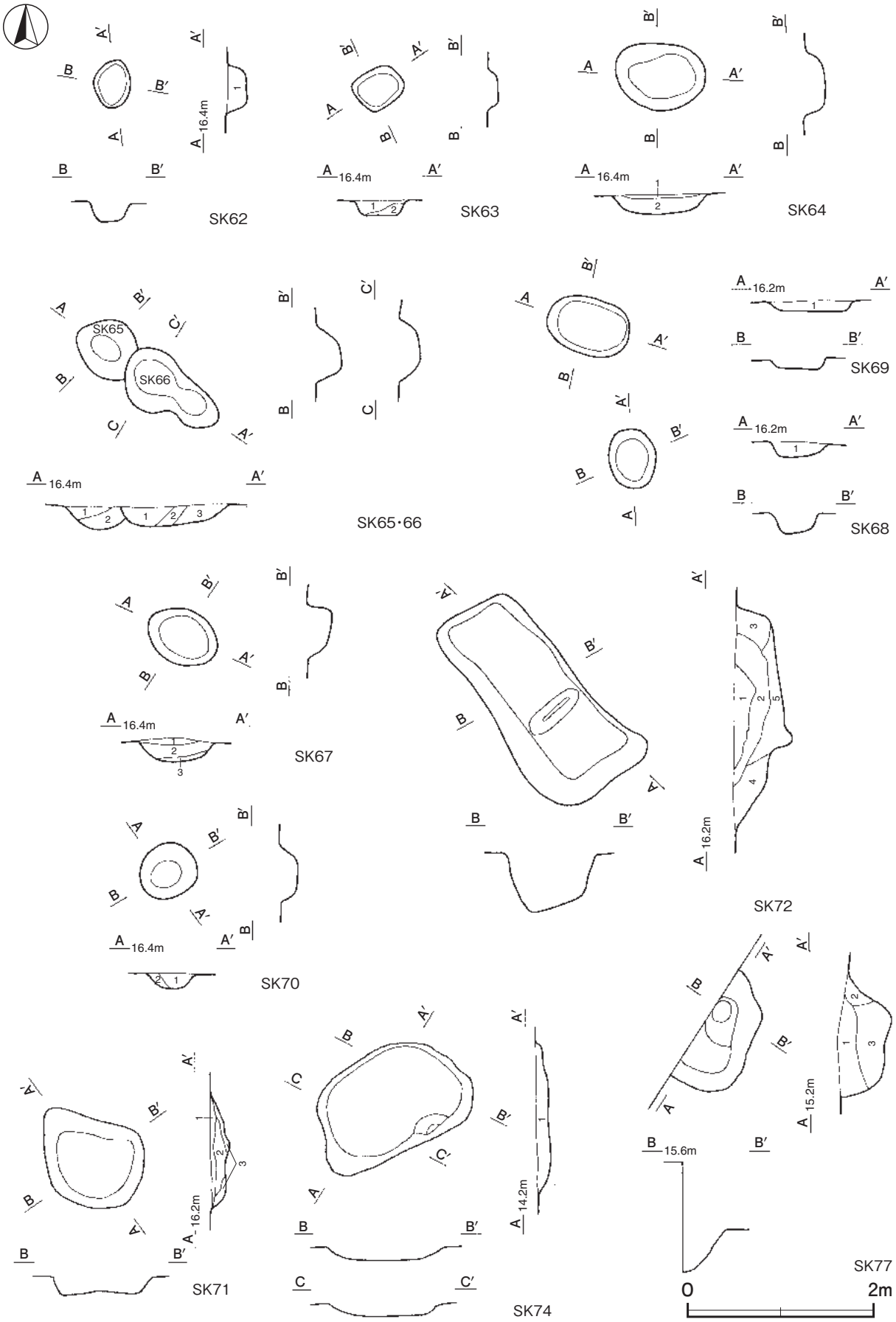
第17図　土坑実測図（3）


SK37
SK36
SK35
SK39
SK48
SK39・48
SK46
SK40
SK41
SK40・46
SK42
SK43
SK38
SK42・43
SK44
SK45
SK49
16.4m
16.2m
16.0m
0
2m

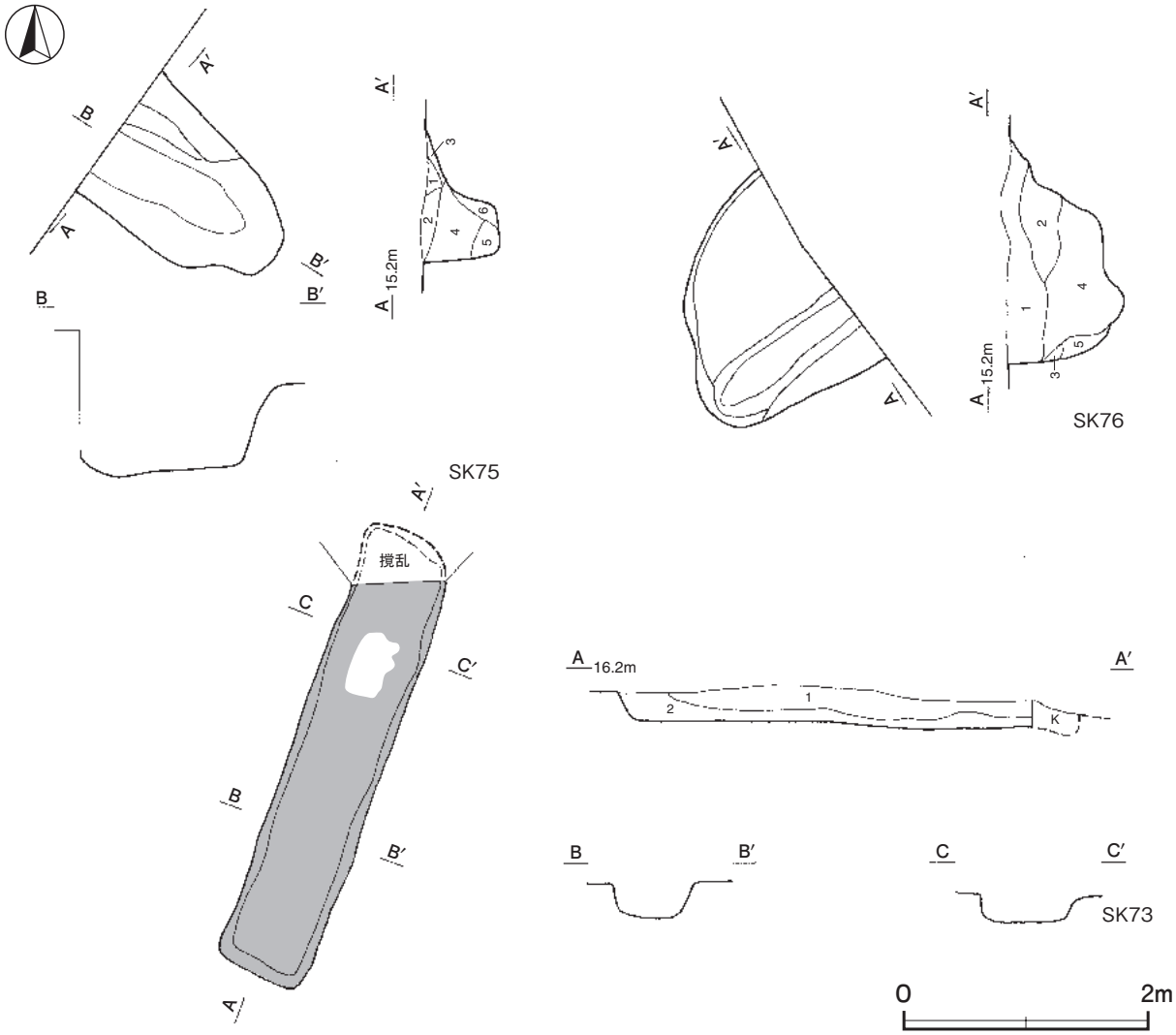
第 18 図　土坑実測図（4）


SK51
SK47
SK50
SK52
SK53
SK54
SK55
SK56
SK61
SK58
SK57
SK59
SK60
SK57・58
SK59・60
A 16.4m
A 16.0m
A 16.2m
A 16.4m
0
2m

第19図　土坑実測図（5）


SK62
SK63
SK64
SK65
SK66
SK65・66
SK69
SK68
SK67
SK72
SK70
SK71
SK74
SK77
16.4m
16.2m
15.2m
15.6m
14.2m
0
2m

第 20 図　土坑実測図（6）



第 21 図　土坑実測図（7）

第１号土坑土層解説
1　極暗褐色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　極暗褐色　ロームブロック少量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量

第２号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量
3　褐　　色　ロームブロック少量

第３号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量

第４号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量

第５号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック微量

第６号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量

第７号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

第８号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

第９号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量

第 10 号土坑土層解説
1　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック中量

第 11 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量

第 12 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
3　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
4　褐　　色　ローム粒子中量

第 13 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量

第 14 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子中量
3　褐　　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

第 15 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ロームブロック少量

第 16 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック少量

第 17 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化物・焼土粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量

第 18 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　炭化物中量，ロームブロック・焼土粒子少量
2　黒　褐　色　炭化物中量，焼土ブロック・ローム粒子少量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量

第 19 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ロームブロック少量

第 20 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量

第 21 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量

第 22 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量

第 23 号土坑土層解説
1　褐　　色　ローム粒子中量
2　褐　　色　ロームブロック少量
3　褐　　色　ロームブロック中量

第 24 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量

第 25 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量

第 26 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量

第 27 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量

第 28 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量

第 29 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量

第 30 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

第 31 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量

第 32 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ロームブロック少量

第 33 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量

第 34 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ロームブロック少量

第 35 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量

第 36 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量

第 37 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量

第 38 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量

第 39 号土坑土層解説
1　にぶい黄褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

第 40 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

第 41 号土坑土層解説
1　極暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

第 42 号土坑土層解説
1　褐　　色　ローム粒子中量

第 43 号土坑土層解説
1　褐　　色　ローム粒子中量

第 44 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量

第 45 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

第 46 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量

第 47 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子微量
5　極暗褐色　ローム粒子微量
6　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

第 48 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
4　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

第 49 号土坑土層解説
1　極暗褐色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブ粒子少量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブ粒子中量

第 50 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ロームブロック少量

第 51 号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

第 52 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　炭化粒子少量，ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量

第 53 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子中量

第 54 号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量

第 55 号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

第 56 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

第 57 号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化粒子中量，ロームブロック少量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量

第 58 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量

第 59 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

第 60 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量

第 62 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量

第 63 号土坑土層解説
1　極暗褐色　ロームブロック少量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量

第 64 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子中量

第 65 号土坑土層解説
1　にぶい黄褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量

第 66 号土坑土層解説
1　にぶい黄褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
3　にぶい黄褐色　ローム粒子多量

第 67 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック少量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量

第 68 号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

第 69 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量

第 70 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量

第 71 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

第 72 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量

第 73 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化物・焼土粒子少量
2　黒　　色　炭化物多量，ローム粒子少量，焼土ブロック微量

第 74 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化物微量

第 75 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　極暗褐色　ロームブロック・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
5　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

第 76 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量，粘土粒子微量
4　黒　褐　色　ローム粒子・粘土粒子微量
5　極暗褐色　粘土粒子少量，ローム粒子微量

第 77 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子微量

表４　その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径（m）	深さ（cm）					重複関係(古→新)
1	C２h9	N－59°－E	［楕円形］	1.88×(0.52)	20	平坦	緩斜	自然		
2	C２g9	N－70°－W	楕円形	0.64×0.58	22	皿状	緩斜	人為		本跡→SK３
3	C２g9	N－46°－E	楕円形	0.60×0.54	20	皿状	緩斜	人為		SK２→本跡
4	C２g9	N－38°－W	楕円形	0.60×0.48	18	皿状	外傾・緩斜	自然		
5	C２g7	N－０°	楕円形	0.50×0.44	11	平坦	緩斜	人為		
6	C２g7	－	円形	0.31×0.31	16	皿状	緩斜	自然		
7	C２h7	N－26°－E	楕円形	0.45×0.36	13	平坦	緩斜	自然		
8	C２h7	N－65°－W	楕円形	0.56×0.43	23	皿状	緩斜	自然		
9	C２f9	N－77°－E	楕円形	0.66×0.47	23	平坦	緩斜	人為		
10	C２d9	N－24°－E	楕円形	0.53×0.48	15	平坦	外傾	自然		
11	C２d9	N－32°－E	楕円形	0.65×0.36	23	平坦	外傾	自然		
12	C２f0	N－80°－E	楕円形	0.90×0.68	26	皿状	緩斜	人為		
13	C３g1	N－70°－E	楕円形	0.68×0.58	36	平坦	外傾	自然		
14	C２f0	－	円形	0.50×0.50	42	皿状	外傾	人為		
15	C２e0	N－33°－W	楕円形	0.48×0.35	18	皿状	緩斜	人為		
16	C３e1	－	円形	1.12×1.06	22	平坦	緩斜	自然	縄文土器	
17	C３e1	N－60°－E	楕円形	2.20×1.14	30	平坦	緩斜	人為		本跡→PG１P6
18	C３d1	N－29°－E	長方形	2.42×1.24	14	平坦	緩斜	人為	縄文土器，陶器	
19	C２e9	N－27°－W	楕円形	0.60×0.42	24	平坦	緩斜	人為	縄文土器	本跡→SK20
20	C２f9	N－47°－E	楕円形	0.70×0.50	26	皿状	緩斜	人為		SK19→本跡
21	C３f2	－	円形	0.52×0.52	30	皿状	外傾・緩斜	自然		
22	C３d2	－	円形	0.64×0.62	26	皿状	外傾・緩斜	人為	縄文土器	
23	C３d2	－	円形	0.82×0.80	52	平坦・U字状	外傾・緩斜	人為	縄文土器	
24	C３e3	N－60°－W	楕円形	0.64×0.44	25	平坦	外傾	自然		
25	C３e3	－	円形	0.55×0.51	15	平坦	緩斜	人為		
26	C３e3	N－57°－E	不整楕円形	0.57×0.34	19	皿状	外傾	人為		
27	C３e3	N－67°－W	楕円形	0.54×0.40	11	皿状	緩斜	人為		
28	C２d0	－	円形	0.73×0.67	17	平坦	外傾	自然		
29	C２c0	－	円形	0.64×0.59	15	平坦	外傾	自然	縄文土器	
30	C２e0	N－81°－E	楕円形	1.19×0.60	31	平坦	外傾	自然		
31	C２g7	N－４°－W	［楕円形］	(0.62)×0.50	30	皿状	緩斜	人為		本跡→SK33
32	C３f2	N－57°－E	［楕円形］	1.40×(0.40)	36	皿状	緩斜	人為		
33	C２g7	N－50°－W	楕円形	0.66×0.60	22	平坦	外傾	人為		SK31・34→本跡
34	C２g7	N－45°－E	楕円形	0.72×0.62	12	平坦	外傾	自然		本跡→SK33
35	C２g7	N－88°－E	不整楕円形	1.16×1.02	42	平坦	外傾	人為		
36	C３b1	－	円形	0.70×0.66	20	皿状	緩斜	自然	縄文土器	
37	C３d1	N－84°－E	楕円形	0.54×0.46	14	皿状	緩斜	人為		
38	C２c9	N－40°－W	楕円形	0.52×0.32	36	皿状	緩斜	人為	縄文土器	
39	C２c8	N－85°－W	［楕円形］	(0.64)×0.50	10	平坦	緩斜	人為		本跡→SK48
40	C３f1	－	円形	0.54×0.52	12	平坦	緩斜	自然	縄文土器	
41	C２a0	N－78°－E	楕円形	0.86×0.56	26	平坦	外傾	自然		
42	C２d9	－	円形	0.40×0.40	16	皿状	外傾・緩斜	自然		
43	C２d0	N－83°－W	楕円形	0.66×0.48	10	平坦	緩斜	自然		
44	C２d8	N－44°－W	楕円形	1.52×0.62	18	平坦	緩斜	人為		
45	C２d7	N－50°－W	［楕円形］	0.86×(0.58)	18	皿状	緩斜	人為	土師器	
46	C３g1	N－67°－E	楕円形	0.72×0.56	10	皿状	緩斜	自然	縄文土器	
47	C２f6	N－37°－W	楕円形	2.11×1.13	55	平坦	外傾	人為		
48	C２c9	N－17°－W	楕円形	1.84×0.74	46	平坦	外傾	人為	縄文土器	SK39→本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径（m）	深さ（cm）					重複関係(古→新)
49	C３a2	N－61°－E	［楕円形］	1.18×(0.75)	38	平坦	外傾	自然	縄文土器	
50	C３b3	N－18°－E	楕円形	1.59×1.18	20	平坦	緩斜	自然	縄文土器	
51	C３e3	N－86°－W	楕円形	0.80×0.53	14	皿状	緩斜	人為		
52	C３b2	N－52°－W	楕円形	0.54×0.45	26	平坦	外傾	自然	縄文土器	
53	C３a1	N－51°－E	楕円形	0.67×0.48	19	平坦	外傾	自然	縄文土器	
54	C３a1	N－69°－E	楕円形	0.43×0.33	27	平坦	外傾	人為		
55	C２a0	－	円形	0.50×0.47	24	平坦	外傾	人為		
56	C３d1	N－74°－W	楕円形	1.52×0.84	18	平坦	外傾	人為		
57	C３c5	N－4°－E	長方形	0.66×0.54	22	平坦	緩斜・外傾	人為		
58	C３c5	N－28°－W	楕円形	0.52×0.38	18	平坦	緩斜・外傾	人為	土師器	
59	C３c5	N－67°－W	楕円形	0.84×0.70	38	皿状	緩斜	人為		
60	C３c5	N－80°－W	楕円形	0.50×0.40	22	皿状	外傾	人為		
61	C３e2	－	円形	0.92×0.88	24	皿状	緩斜	不明	縄文土器，土師器	
62	C３c4	N－13°－E	楕円形	0.52×0.40	14	平坦	緩斜	人為		
63	C３c4	N－57°－E	隅丸長方形	0.50×0.42	22	平坦	外傾	人為		
64	C３d3	N－90°	楕円形	0.98×0.71	22	平坦	外傾	人為		
65	C３d4	N－56°－W	［楕円形］	(0.62)×0.62	29	平坦	外傾	自然	縄文土器	本跡→SK66
66	C３d5	N－56°－W	楕円形	1.15×0.65	24	平坦	外傾	自然	縄文土器	SK65→本跡
67	C３e5	N－65°－W	楕円形	0.80×0.58	25	平坦	外傾	自然	土師器	
68	C３c2	N－10°－W	楕円形	0.65×0.51	22	平坦	外傾	人為		
69	C３b2	N－72°－W	楕円形	0.90×0.60	11	平坦	外傾	人為		
70	C３b3	－	円形	0.64×0.60	20	平坦	外傾	人為	縄文土器	
71	C３c1	N－38°－W	不整楕円形	1.30×1.06	20	平坦	緩斜	人為	焼成粘土塊	
72	B４e3	N－37°－W	長方形	2.42×0.98	62	平坦・U字状	緩斜	自然・人為	縄文土器，土師質土器	
73	B４e5	N－20°－E	隅丸長方形	3.86×0.76	20	平坦	外傾	人為		
74	C３f2	N－41°－E	不整楕円形	1.70×1.15	14	平坦	緩斜	人為	縄文土器	
75	C３f2	N－54°－W	［楕円形］	(1.60)×1.08	70	平坦	外傾	人為		
76	B２g4	N－17°－W	［楕円形］	(1.86)×(1.20)	96	U字状	外傾	人為	縄文土器	
77	C２e3	N－32°－E	［楕円形］	1.78×(0.58)	45	皿状	緩斜	人為	土師器	

(2) 溝跡

今回の調査で，時期・性格ともに不明の溝跡２条を確認した。平面図については遺構全体図で掲載する。

第１号溝跡（第３・22図）

位置　調査区西部のＢ２f3～Ｃ２a2区，標高15ｍほどの緩斜面部に位置している。

重複関係　第１号遺物包含層を掘り込んでいる。

規模と形状　Ｃ２a2区から北東方向（Ｎ－15°－Ｅ）に直線状に延びている。北側が調査区域外に延びているため，長さは22.9ｍしか確認できなかった。上幅0.3～0.72ｍ，下幅0.08～0.32ｍ，深さ19～21cmである。断面は浅いＵ字状で，壁は外傾して立ち上がっている。底面の標高は，北東部で14.4ｍ，南西部で14.5ｍで，北東へ向けて緩やかに低くなっている

覆土　単一層である。砂粒を含み均質な含有物であることから，自然堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子少量，砂粒微量

遺物出土状況　縄文土器片 14 点（深鉢），土師器片 1 点（高坏），石核 1 点（黒曜石）と剥片 2 点（滑石）が出土している。

所見　時期判断できる遺物が出土していないため，時期は不明である。第２号溝跡の東側およそ 3.5 mに位置し，第２号溝跡と同様に北部の低地に向かって勾配がついていることから排水のための溝と考えられる。

第２号溝跡（第３・22 図）

位置　調査区西部のＢ２f2 ～Ｂ２b1 区，標高 15 mほどの緩斜面部に位置している。

重複関係　第１号遺物包含層を掘り込んでいる。

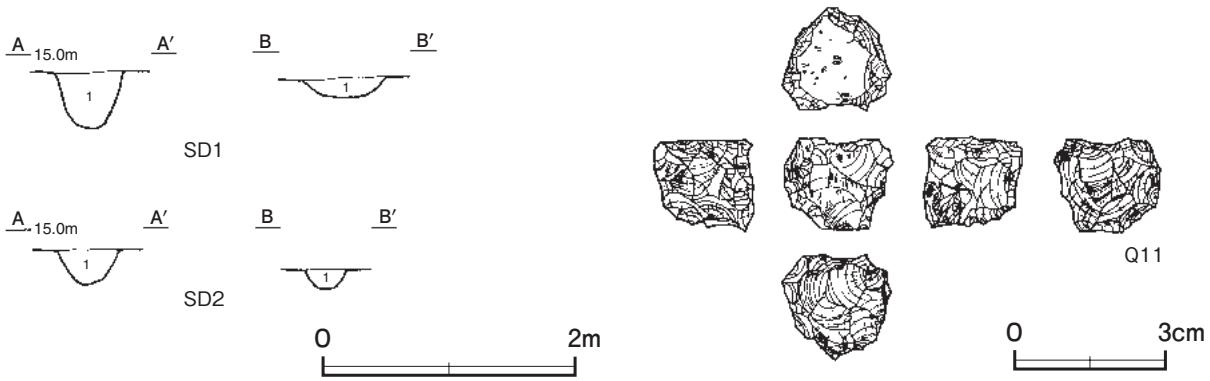
規模と形状　Ｂ２b1 区から北東方向（Ｎ－ 16°－Ｅ）にほぼ直線状に延びている。北側が調査区域外に延びているため，長さは 6.7 mしか確認できなかった。上幅 0.28 ～ 0.4 m，下幅 0.08 ～ 0.3 m，深さ９～ 15cmである。断面は浅いＵ字状で，壁は外傾して立ち上がっている。底面の標高は，北東部で 14.4 m，南西部で 14.5 mで，北東へ向けて緩やかに低くなっている

覆土　単一層である。砂粒を含み均質な含有物であることから，自然堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・砂粒・鉄分微量

遺物出土状況　縄文土器片１点（深鉢）が出土しているが，細片のため図示することができない。

所見　時期判断できる遺物が出土していないため，時期は不明である。第１号溝跡の西側およそ 3.5 mに位置し，第１号溝跡と同様に北部の低地に向かって勾配がついていることから排水のための溝と考えられる。



第 22 図　第１・２号溝跡，第１号溝跡出土遺物実測図

第１号溝跡出土遺物観察表（第 22 図）

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 11	石核	1.8	2.0	2.2	10.0	黒曜石	亜角礫を素材とした石核　剥片剥離毎に打面を不規則に転移	覆土中	

表５　その他の溝跡一覧表

番号	位　置	方　向	形　状	規　模				断　面	壁　面	覆　土	主な出土遺物	備考
				長さ（m）	上幅（m）	下幅（m）	深さ(cm)					重複関係(古→新)
1	Ｂ２f3 ～Ｃ２a2	Ｎ－ 15°－Ｅ	(直線)	(22.9)	0.3 ～ 0.72	0.08 ～ 0.32	19 ～ 21	浅いU字状	外傾	自然	縄文土器，土師器	第１号包含層→本跡
2	Ｂ２f2 ～Ｂ２b1	Ｎ－ 16°－Ｅ	(直線)	(6.7)	0.28 ～ 0.4	0.08 ～ 0.3	9 ～ 15	浅いU字状	外傾	自然	縄文土器	第１号包含層→本跡

(3) ピット群

今回の調査でピット群を２か所確認した。いずれのピット群も建物跡を想定できるような配置ではなく，遺物も出土していないことから時期を明らかにすることができない。ここではピット群ごとに計測表を掲載し，平面図については遺構全体図で掲載する。

第１号ピット群（第３図）

位置　調査区中央部のＣ２d8 ～Ｃ３e1 区，標高 16 mほどの緩斜面部に位置している。

重複関係　第 17 号土坑を掘り込んでいる。

規模　東西 17 mほど，南北 15 mほどの範囲にピット６基を確認した。形状は長径 30 ～ 48㎝，短径 30 ～ 38㎝の円形または楕円形で，深さは９～ 36㎝である。

所見　時期・性格ともに不明である。

第１号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模（cm）			番号	位置	形状	規模（cm）		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	Ｃ２f7	楕円形	42	36	36	4	Ｃ２d8	円形	36	34	23
2	Ｃ２e8	円形	30	30	24	5	Ｃ２g9	楕円形	40	32	23
3	Ｃ２f8	楕円形	48	30	20	6	Ｃ３e1	円形	40	38	9

第２号ピット群（第３図）

位置　調査区中央部のＢ２j4 ～Ｃ３c5 区，標高 16 mほどの緩斜面部に位置している。

規模　東西 28 mほど，南北 13 mほどの範囲にピット 18 基を確認した。形状は長径 20 ～ 90㎝，短径 20 ～ 56㎝の円形または楕円形で，深さは 11 ～ 74㎝である。

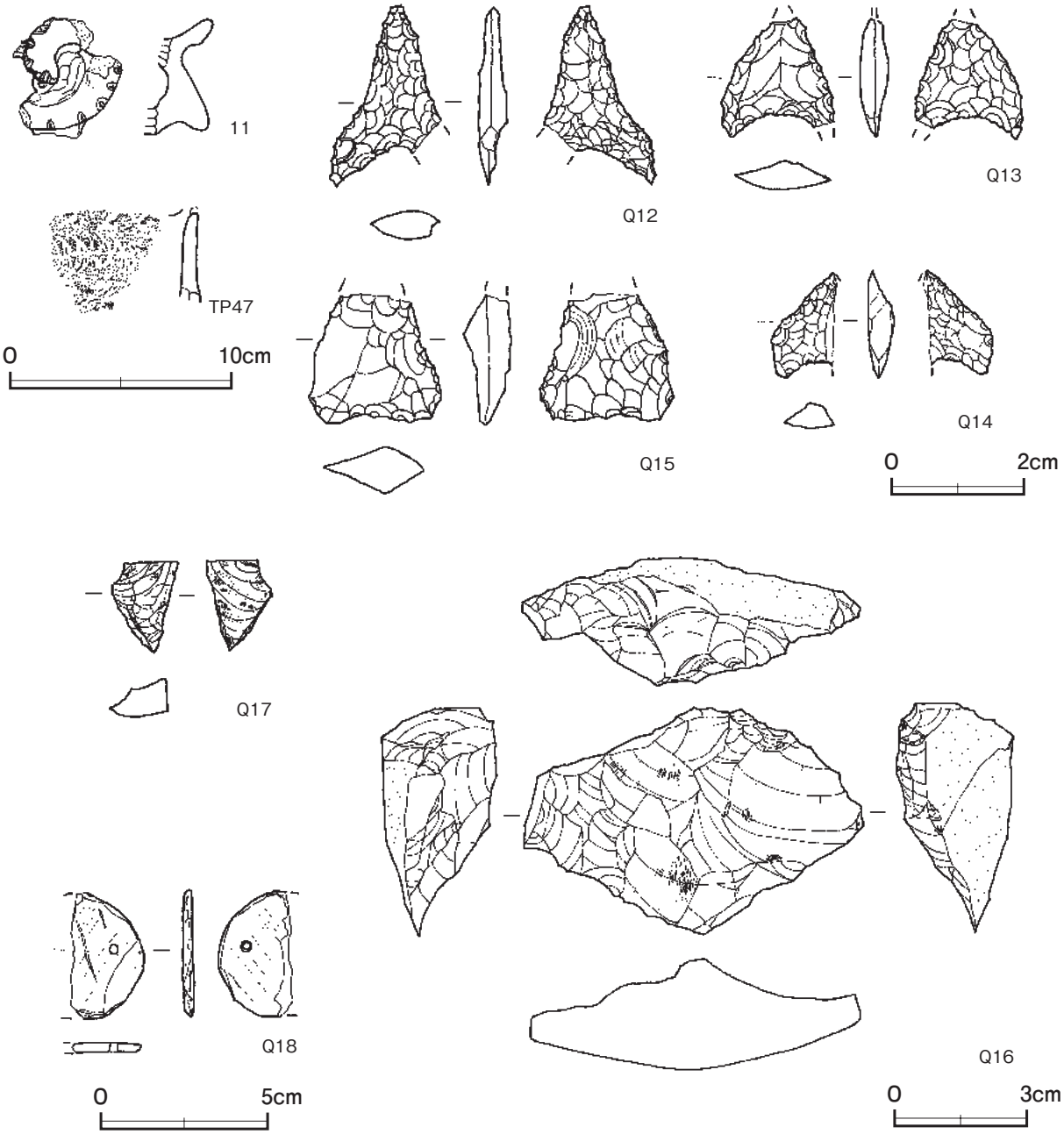
所見　時期・性格ともに不明である。

第２号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模（cm）			番号	位置	形状	規模（cm）		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	Ｃ２c9	楕円形	50	36	49	10	Ｃ３b4	円形	20	20	14
2	Ｃ２a9	円形	28	28	18	11	Ｃ３b4	楕円形	40	34	11
3	Ｃ２a0	楕円形	30	26	25	12	Ｃ３c4	楕円形	40	34	17
4	Ｃ３b1	楕円形	34	30	30	13	Ｃ３a5	楕円形	38	34	35
5	Ｂ２j4	楕円形	42	38	28	14	Ｃ３c5	円形	30	28	25
6	Ｃ３a4	円形	30	28	31	15	Ｂ２j5	楕円形	76	40	74
7	Ｃ３b4	楕円形	44	38	28	16	Ｃ３a5	円形	36	36	40
8	Ｃ３b4	円形	22	20	12	17	Ｃ３b6	円形	34	34	27
9	Ｃ３b4	円形	38	36	18	18	Ｃ３b6	楕円形	90	56	21

(4)　遺構外出土遺物（第 23 図）

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について，実測図と観察表を掲載する。



第 23 図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第 23 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
11	縄文土器	深鉢	－	(5.1)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	刻みを有する把手	表土中	10%

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP47	縄文土器	深鉢	長石	にぶい橙	口唇部に刻み　波状貝殻文	表土中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 12	鏃	2.7	(1.7)	0.4	(1.1)	チャート	凹基無茎鏃　両面押圧剥離　一部欠損	Ｃ２g9 区	PL6
Q 13	鏃	(1.8)	(1.6)	0.4	(0.9)	チャート	凹基無茎鏃　両面押圧剥離　一部欠損	Ｃ３f1 区	PL6
Q 14	鏃	1.8	(0.9)	0.4	(0.3)	チャート	凹基無茎鏃　両面押圧剥離　一部欠損	表土中	
Q 15	鏃未製品ヵ	(1.9)	2.0	0.7	(2.5)	チャート	両面押圧剥離　一部欠損	表土中	PL6
Q 16	石核	5.2	7.7	2.6	73.2	チャート	一部に自然面を残す石核　調整を伴う不規則な剥離後打面転移	表土中	
Q 17	剥片	2.1	1.6	0.8	2.9	チャート	縦長剥片　主要剥離面の剥離方向に対し同一方向からの剥離	表土中	
Q 18	双孔円板	3.8	(2.2)	0.3	(4.7)	滑石	丁寧な研磨調整　孔径 0.25cm　一方向からの穿孔	Ｂ３j0 区	

第４節　ま　　と　　め

1　はじめに

今回の調査で，竪穴住居跡２軒（縄文１･平安１），炉跡１基（縄文），遺物包含層１か所（縄文）の他に，時期不明の土坑 77 基，溝跡２条，ピット群２か所を確認した。

当遺跡は，「富田の谷」と呼ばれる浅い谷の左岸に位置しており，調査区は谷に向かって緩やかに傾斜している。確認した遺構の配置や周囲の地形などから，遺跡は東側の台地上に広がっていると考えられ，今回の調査区はその西側域と想定される。ここでは各時期の様相を概観し，若干の考察を加えることでまとめとしたい。

なお，文章中の数字は本文中の図版番号である。

2　縄文時代

(1)　住居跡について

今回の調査で確認した該期の住居跡１軒のみである。時期は，出土した土器から中期中葉（阿玉台Ⅳ式）の時期と判断した。1 は平縁の深鉢で，粗製土器と考えられる。全面にＲＬの単節縄文が施文されているが，口縁部下端には輪積痕を残している。この土器は煮炊きに使われていたと思われ，下半部は被熱を受け器面は荒れており，一部剥離している部分もある。上半部は噴きこぼれによると考えられる変色が見られる。

住居跡は楕円形を呈しており，長軸線に対して直交するように主柱穴が配されている。また，壁際には壁柱穴が配置されている。このような形態の住居跡については，鈴木美治氏は阿玉台Ｉｂ～Ⅳ式期にかけて検出例が多い[1)]としている。

(2)　遺物包含層について

包含層の範囲は東西 21 m，南北 30 mほどで，特にＢ２h4 を中心に集中して遺物が出土している。出土した縄文土器片 855 点の内で時期が明確に分かるものは 398 点である。内訳は，早期 56 点（14.0％），前期 234 点（58.8％），中期 47 点（11.8％），後期 61 点（15.4％）である。残りの 457 点は細片で，摩滅も激しく時期を明らかにすることができなかった。土層観察や遺物の出土状況から，包含層は台地上から土砂と共に遺物が流れ込むことで形成されたと考えられる。形成時期は，早期前半から後期後葉にかけてと考えられ，前期の土器を主体としている。また，調査によって東側の台地上には当該期の集落が存在することが想定される。

3　平安時代

住居跡１軒を確認したが，それ以外の該期に関わる遺構は確認していない。時期は，出土した土器から９世紀後半と判断した。本跡で出土している土器のうち，７はロクロ成形の土師器坏である。10は，常総型の甕で，中位には指頭痕が，上位には輪積痕が認められるなど，粗雑な印象を受ける。口縁部は粘土紐を付加して造りだしたと考えられ，断面形がＳ字状を呈している。８・９は須恵器坏で，体部下端のヘラ削りの幅が広くなり底径が縮小し始めているタイプ（８）とさらに底径が縮小し，体部の外傾度が強くなっているタイプ（９）が出土している。

本跡は竈が南東コーナー部に付設されており，竈を住居の壁の中央に構築することが常態となっている中では特異な形状である。これまでに，結城市の下り松遺跡[2]やつくば市の下大井遺跡[3]などでも報告されているが，いずれの報告でも同時期の住居群の中での検出数は少数で，竈をコーナー部に付設する意味や目的は明らかになっていない。当遺跡も１軒のみの検出で，出土遺物も限られていることから，竈をコーナー部に付設する意味や目的を明らかにすることはできなかった。

4　おわりに

今回の調査で，当遺跡には縄文時代中期の集落や平安時代後期の集落が存在したことが明らかとなった。また，確認した遺構の配置や周囲の地形などから遺跡の中心は東側の台地上に広がっていくことも想定でき，今回確認した縄文時代中期の住居跡や平安時代後期の住居跡は，その集落の外縁の一部である可能性が高いと言えよう。さらに，遺物包含層の調査によって台地から「富田の谷」に向かって土砂と共に遺物が流れ込んでいたことが判明したことも，それらの土器に関わる集落が東側の台地上に存在していたことを裏付けている。

「富田の谷」の左岸に位置する談義所遺跡や長丁遺跡，右岸の打出遺跡や黒阿弥陀遺跡を含む当遺跡周辺では，移動や廃絶を繰り返しながら複数の時期にわたって集落が営まれていたものと考える。近年，長右ヱ衛門元屋敷遺跡や馬立原遺跡，宮内遺跡など，坂東市内での調査事例[4]が増加し，様々な様相が明らかになってきている。今後の調査により，当遺跡の性格が明確になっていくことに期待したい。

註

1）鈴木美治「阿玉台期における竪穴住居跡の形態についての一考察」『年報３』茨城県教育財団　1984年３月

2）川津法伸「一般国道50号バイパス改築工事地内埋蔵文化財調査報告書　下り松遺跡･油内遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第145集　1999年３月

3）川津法伸「一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書１　下大井遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第171集　2001年３月

4）公益財団法人茨城県教育財団「埋蔵文化財　年報31」 2012年６月

写　真　図　版

調査区全景（南上空から）

第１号住居跡
遺物出土状況

第１号住居跡
Ｐ３遺物出土状況

第１号住居跡
完掘状況

第２号住居跡
遺物出土状況

第２号住居跡
竈遺物出土状況

第２号住居跡
完　掘　状　況

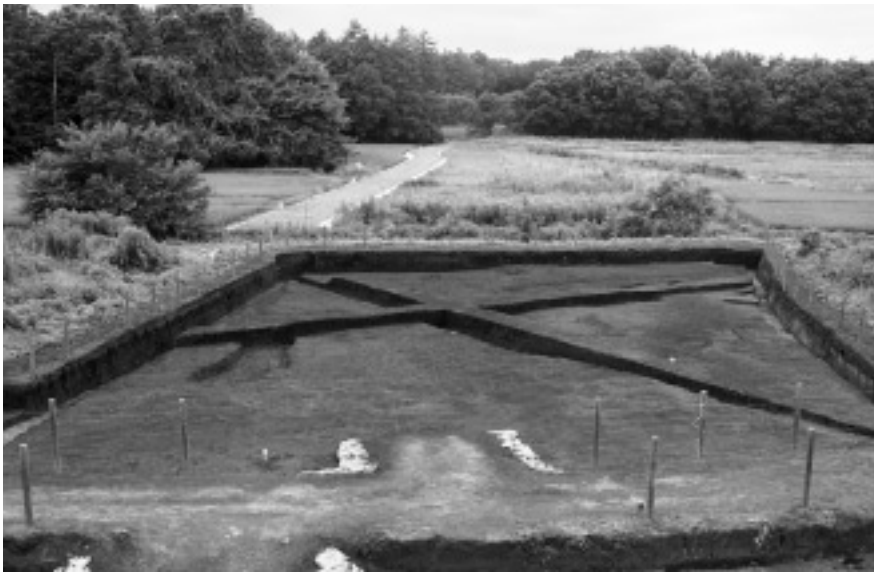
第 1 号 溝 跡
完 掘 状 況

B 区
遺 構 確 認 状 況

B 区
遺 構 完 掘 状 況

第１号遺物包含層
確　認　状　況

第１号遺物包含層
遺 物 出 土 状 況



第1号遺物包含層
完　掘　状　況

SI 2-7

SI 1-1

SI 2-8

SI 2-10

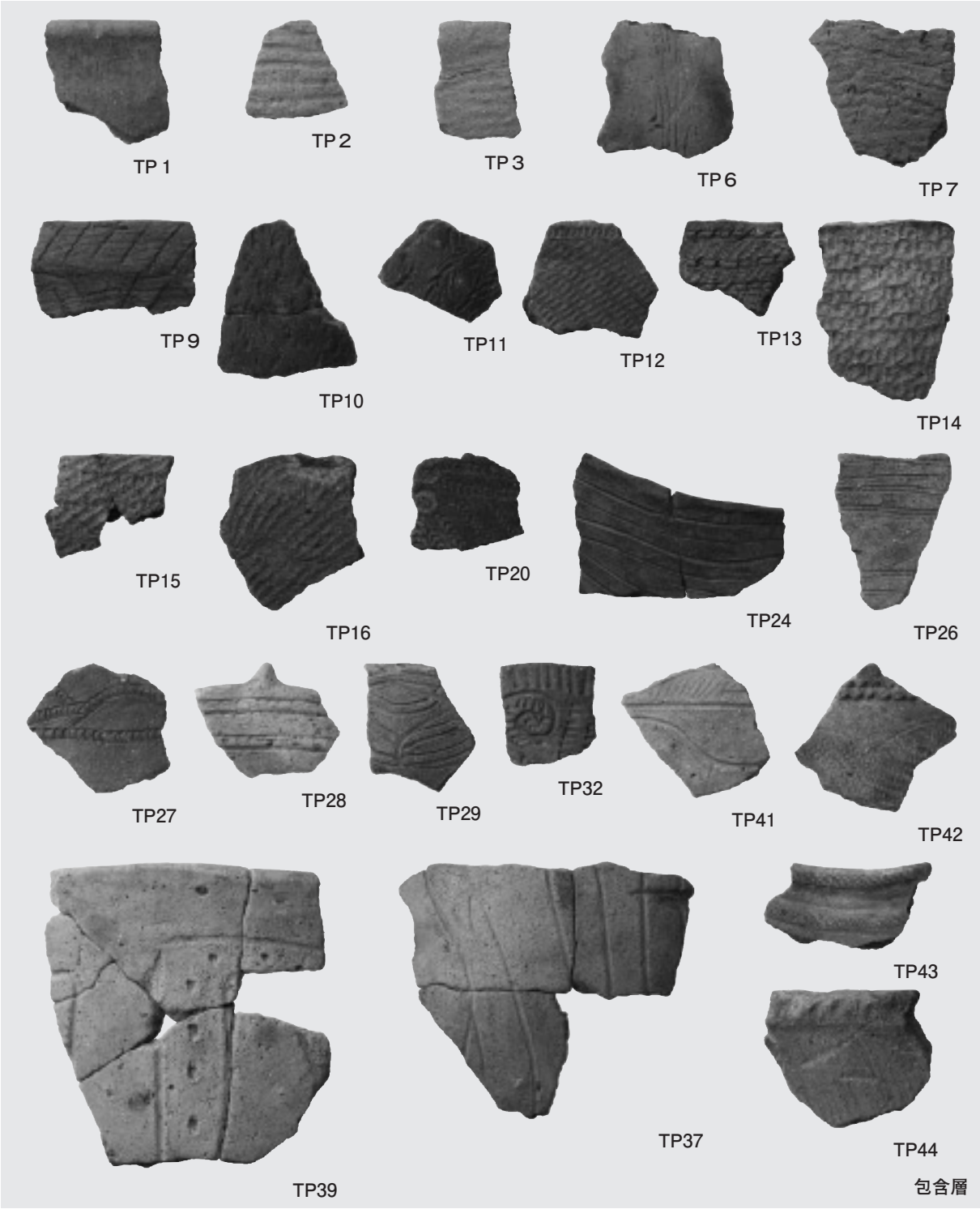
SI 2-9

包含層-3

包含層-2

SI 2-DP 1

第1・2号住居跡，第１号遺物包含層出土遺物



第 1 号遺物包含層，遺構外出土遺物

抄　　録

ふりがな	こまよせだめいせき
書　　名	駒寄溜遺跡
副 書 名	主要地方道結城坂東線バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第372集
著 者 名	綿引英樹
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団
所 在 地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　ＴＥＬ 029－225－6587
発 行 日	2013（平成25）年3月15日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
駒寄溜遺跡	茨城県坂東市弓田字立山1071－1番地ほか	08218－226	36度05分19秒	139度53分25秒	15～17 m	20110601～20110731	2,878 ㎡	主要地方道結城坂東線バイパス事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
駒寄溜遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡　1軒 炉跡　1基	縄文土器（深鉢）	
		平安	竪穴住居跡　1軒	土師器（坏・甕），須恵器（坏），土製品（支脚）	
	その他	縄文	遺物包含層　1か所	縄文土器（深鉢・浅鉢），土師器，土師質土器（小皿），陶磁器（天目茶碗・擂鉢・皿類・碗類・瓶類・鉢類・甕類），石器（鏃・石皿・敲石・砥石），石核，剥片，椀状滓	
		時期不明	土坑　77基 溝跡　2条 ピット群　2か所	縄文土器（深鉢）土師器（甕類），石器・石製品（鏃・双孔円板），石核，剥片	

要　　約	調査区は台地から低地へと向かう緩斜面部で，縄文時代中期の住居跡と平安時代後期の住居跡を確認した。また，遺物包含層からは縄文時代早期から後期にかけての土器片が出土しており，長期にわたって土器片が流れ込んでいたことが明らかとなった。 遺構の配置や周囲の地形などから遺跡の中心は東側の台地上に広がることが想定される。

仕　様

編　　集	ＯＳ	Microsoft Windows 7
		Home Premium　Service Pack 1
	レイアウト	Adobe InDesign CS5
	図版作成	Adobe Illustrator CS5
	写真調整	Adobe Photoshop CS5
	Scanning	6×７film　Nikon SUPER COOLSCAN9000ED
組　　版		OpenType13級リュウミンPro・Ｌ 基本
		Adobe InDesign CS5
写真製版		スクリーン線数　モノクロ175線　カラー210線

・　印刷所へは，Adobe InDesign CS5でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第372集

駒　寄　溜　遺　跡

主要地方道結城坂東線バイパス事業
地内埋蔵文化財調査報告書

平成25（2013）年　3月12日　印刷
平成25（2013）年　3月15日　発行

発行　公益財団法人茨城県教育財団
〒310－0911　水戸市見和１丁目356番地の２
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029－225－6587
ＨＰ　http：//www.ibaraki-maibun.org

印刷　いばらき印刷株式会社
〒319－1112　那珂郡東海村村松3115-3
TEL　029－282－0370